エドゥアール・シュレーと
ルドルフ・シュタイナー
「キリスト教的秘教について」

〔CONTENTS〕

ルドルフ・シュタイナー
「バール文書（documents de Barr）」（GA262）

ルドルフ・シュタイナーの記録
　1907年9月、アルザスのバールにて、
エドゥアール・シュレーのために執筆

〔バール文書について〕
〔バール文書〕
〔上記の記録への補遺〕

〈ルドルフ・シュタイナー全集への寄稿
　ルドルフ・シュタイナー遺産管理アーカイブからの刊行物
第42号 1973年夏（Heft42）〉

〔本号（Heft4）の内容について〕

エドゥアール・シュレー
シュタイナー『神秘的事実としてのキリスト教』
フランス語訳への序文

I　ルドルフ・シュタイナーの人格とその発展
II　二つの秘教的伝統 —— 東洋と西洋の秘儀参入
III　秘教的キリスト教の未来

神秘学遊戯団

■エドゥアール・シュレーと
ルドルフ・シュタイナー
キリスト教的秘教について

ルドルフ・シュタイナー
「バール文書（documents de Barr）」（GA262）

ルドルフ・シュタイナーの記録
1907年9月、アルザスのバールにて、
エドゥアール・シュレーのために執筆

〔バール文書について〕
〔バール文書〕
〔上記の記録への補遺〕

〔バール文書について〕

「バール文書」（Documents de Barr）は、
1907年9月にアルザス地方のバール（Barr）で、
フランスの作家エドゥアール・シュレーのために
ルドルフ・シュタイナーが書いたメモ。

GA262は「シュタイナーとマリー・シュタイナー＝フォン・ジーフェルスの
往復書簡と文書 1901–1925）」の巻で、
その導入部にこの文書が収められている。
（GA46（遺稿・断片）にも収録されている）

・背景

シュレーは、マリー・フォン・ジーフェルスを介して
シュタイナーと知り合い、親交を深めたが、
1906年にパリでシュタイナーの講義を聞き、強く感銘を受け、
1907年9月、シュレーはバールの自宅にシュタイナーとマリーを招き、
滞在中に様々な質問を投げかけた。

特に、シュタイナーの『神秘的事実としてのキリスト教』の
フランス語訳の序文を書くために、自伝的情報や薔薇十字の流れ、
神智学協会についての説明を求めたのが直接のきっかけで、
シュタイナーはこれに応じて手書きのメモを残した。

これらは公開を前提としたものではなく、
個人的・情報提供的な性格が強く、
その第3部には「この形ではまだ直接言えない」という注記がある。

●基本的な視点

この「バール文書」は、ルドルフ・シュタイナーが
自らの霊的・知的形成の道筋を記した自伝的スケッチ。

核心は、西洋の厳密な哲学・自然科学
（特にゲーテ的方法やヘッケルの系統発生学）を基盤としながら、
隠されたオカルト的洞察とマスター（導師）の導きを通じて、
薔薇十字的・キリスト教的秘教を公の精神生活に導入する準備にある。

特に強調されるのは、

・時間の二重潮流
（前進する進化と逆行するオカルト・アストラル的内流／インボリューション）
の認識が霊視の条件であること

・オカルト思想は当面
「観念論哲学の衣」に包んで公にするよう指示されていたこと

・40歳になるまで公にオカルト教師として登場しないこと
（マスターたちの教え）

・神智学協会の東洋偏重は、
西洋文化の中心である「キリスト原理」を欠くため不十分であり、
正しい道は西洋の知識＋薔薇十字・キリスト教的秘教の調和であること

全体として、科学と宗教の調和、地球の本来の意味
（生けるキリストの意図の実現）を目指す立場を明確にしている。

●要点

［Ⅰ］知的・霊的形成の自伝的記録

・少年期〜青年期の哲学的基礎：

15〜16歳頃からカントを集中的に研究。
その後フィヒテ、シェリング、ヘーゲルへと進む。
公式の学問（数学・化学・物理学・動植物学・地質学など）は、
歴史学や文学より霊的世界観の確実な基盤を与えた。

・早期のオカルト的洞察（時間の概念）：

学問とは無関係に、純粋にオカルト的神秘体験から
「時間」の完全な明晰さがもたらされた。
前進する進化と干渉する逆行する進化
（オカルト・アストラル的潮流）の存在を認識。

これが霊視を得る条件。

・マスターとの出会い：

まずマスターの代理人（フェリックス・コグツキ：
植物の隠された力、自然霊との交わりを淡々と語る薬草収集家）に出会い、
後にマスター本人に出会う。
周囲に迷信めいたものはなく、カトリック聖職者の陰の部分を直接見ていた。

・ゲーテ研究と公的活動：

カール・ユリウス・シュレーアーとの親交を通じて
ゲーテの自然科学論文集編集を任される。
『認識論（ゲーテ的世界観の認識論要綱）』（1886）、
『真理と科学』『自由の哲学』で純粋に哲学的に自身の世界観を提示。
ワイマールのゲーテ・シラー文庫時代、ニーチェ論、
ヘッケル擁護（系統発生学を19世紀後半ドイツ精神生活の最重要業績と評価）、
労働者教育学校での活動などを経る。

・オカルトの公的開始：

背後のオカルト導き手からは「すべてを観念論哲学の衣に包め」との助言。
時代思潮を完全に理解した上で、40歳を迎えてから公に神智学に身を捧げる
（それ以前の公的教授は誤りが生じる、というマスターの教え）。
労働者学校ではマルクス主義との対立を経て留任されるが、
指導者の圧力で後に辞職。

［II］薔薇十字の潮流とマニのイニシエーション

・クリスチャン・ローゼンクロイツは15世紀前半に東洋へ旅し、
東洋と西洋のイニシエーションを調和させた。
帰国後、西洋の薔薇十字方向性が確立。
19〜20世紀転換期に、自然科学が一定の問題を解決した時点で
秘教を公にする準備を担う秘密の学校。

・挙げられた問題：
①分光分析（宇宙の物質的構成の解明）、
②物質的進化論の有機体科学への導入、
③催眠・暗示による通常意識以外の意識状態の認識。

・それ以前の西欧には「上高地からの未知の人」を通じた
キリスト教的・神秘主義的イニシエーション
（サン・ヴィクトール、エックハルト、タウラーなど）。

・薔薇十字潮流内の「高次の階梯」としてマニのイニシエーション
（1459年にローゼンクロイツを参入させた）。

内容は「悪の機働きについての真の認識」。
これは長期間大衆から秘匿されなければならな
（わずかな光でも破滅をもたらす例としてギュイヨーやニーチェを挙げる）。

［Ⅲ］神智学協会への批判と正しい道

・1875年ニューヨーク設立当初は西洋的性格
（『ヴェールを脱いだイシス』も西洋的だが、
真理が歪曲・風刺画的に再現されている。
歪みはブラヴァツキーの魂の器としての不適切さに起因）。

・西洋の参入者たちは計画を断念。
門が開かれた後、東洋の参入者が指導。
アングロ・アメリカニズムによる唯物論化の危機を見据え、
東洋の霊的認識を「予防接種」として移植しようとした。
結果、『秘教的仏教』や『秘密教義』も再び歪曲。
マスターたちは公式協会から影響力を引き揚げ、
協会は好ましくないオカルト諸力の場となった。

・アニー・ベザントの短い純粋なエピソードも、
特定のインド人の影響で終わる。

・核心的主張：

東洋のイニシエーションは
「キリスト原理」に触れないままにせざるを得ない。
これがなければ西洋文化に決定的影響を与えられず、
セクト化するか、キリスト原理を抹消するしかない。
後者は地球の本来の意味を否定することに等しい。
薔薇十字団の最も深い目標は、
キリストの意図を完全な英知・美・行為として明かすこと。

・図式：

正しいあり方：西洋の知識 —— 西洋の秘教（薔薇十字・キリスト教的）
—— 健全な発展
誤ったあり方：西洋の知識 —— 東洋の秘教
—— 不毛な混交（シネットやブラヴァツキーの例）

〔補遺（エドゥアール・シュレーによる）〕

・植物のエーテル体や元素霊を見る能力を持つ
薬草収集家との出会い（18歳頃）の詳細。
二重の潮流（進化と内流／インボリューション）の感覚が
霊的認識の条件であることを強調。

・19歳でマスターに出会う。
マスターは市民的職業の仮面をかぶり、公に姿を現さず、
人類の歴史に間接的に影響を与える存在。
弟子に「敵（現代の唯物論的科学＝ドラゴン）を理解し、その皮をまとうこと」
「雄牛の角を捕らえること」を指示し、「お前自身であり続けよ」と告げた。

●本文〔バール文書〕

私は非常に早い時期にカントへと導かれました。15歳から16歳の頃にはカントをきわめて集中的に研究し、ウィーンの高等技術学校へ進学する前には、19世紀初頭のカントの正統な後継者たちについて深く学んでいました。彼らはドイツの公式な科学史・哲学史からは完全に忘れ去られており、今ではほとんど名前も挙げられません。その後、フィヒテとシェリングへの詳細かつ深い没頭が加わりました。

この時期に――そしてこれは、すでに外的なオカルト的な影響に属することですが――「時間」の概念についての完全な明晰さがもたらされました。この認識は当時の学問的な研究とは何の関係もなく、完全にオカルト的な神秘体験の側から導かれたものでした。それは、前進する進化と干渉し合う、逆行する進化――すなわちオカルト・アストラル的な進化――が存在するという認識でした。この認識こそが、霊視を得るための条件なのです[1]。

※原註〔[1] シュレによる28ページの記述、ならびに『ルドルフ・シュタイナー全集（GA）寄稿集』第83/84号所収のルドルフ・シュタイナーの自伝的講演（1913年2月4日、ベルリン）、GA 258所収の講演（1923年6月14日、ドルナハ「人智学協会との関係における人智学運動の歴史と条件」）、さらにヘラ・ヴィースベルガーによる「時間認識の伝記的発生の瞬間」および「人智学研究の端緒における〈根本神経〉としての時間認識」（『ルドルフ・シュタイナー全集寄稿集』第49/50号、15～28ページ）を参照。〕

その後に、M［マスター（導師）］の代理人との知遇を得ました。それから、集中的なヘーゲル研究が始まりました。

それから、1850年代以降にドイツで発展した近代哲学の研究、とりわけ、あらゆる分岐にわたるいわゆる「認識論」の研究へと進みました。

私の少年時代は、外的に誰かが意図したわけでもないのに、迷信を持った人間に一人も出会うことなく過ぎ去りました。もし私の周囲で誰かが迷信めいたことを口にしても、それは常に強い拒絶の念を込めて語られるだけでした。いわゆる侍者として典礼行為に加わることで、教会の礼拝こそ知るようになりましたが、私が出会った聖職者たちも含め、どこにも本物の敬虔さや宗教心は存在していませんでした。それどころか、カトリック聖職者の特定の陰の部分が、絶えず私の目に飛び込んできたのです。

私はすぐにM［マスター（導師）］[2]に出会ったわけではなく、まずは彼から遣わされた人物[3]に出会いました。その人物は、あらゆる植物の働きの秘密、そして植物と宇宙および人間本性との結びつきについて完全に参入していました。彼にとって自然の霊たちとの交わりはごく当たり前のことであり、熱狂することなく淡々と語られましたが、それゆえに、いっそう私のなかに熱狂を呼び起こしました。

※原註〔[2] 詳細は不明。〕

※原註〔[3] フェリックス・コグツキ（ウィーン 1833年〜1909年 トルマウ）。『ルドルフ・シュタイナー全集（GA）寄稿集』第83号所収の自伝的講演（1913年2月4日、ベルリン）、および『我が人生の歩み』（GA 28）を参照。さらにエミール・ボック著『ルドルフ・シュタイナー：その生涯と生涯の仕事に関する研究』（シュトゥットガルト、1961年）を参照。〕

公式の学業は、数学、化学、物理学、動物学、植物学、鉱物学、地質学に向けられていました。これらの学問は、当時のドイツの学術界において明確な方法論も意味深い展望もなく存在していた歴史学や文学などに比べ、霊的な世界観の基礎を築く上で、はるかに大きな確実性をもたらしてくれました。

ウィーンでの大学の最初の数年間に、カール・ユリウス・シュレーアーとの知遇を得ました。最初、私は彼の「ゲーテの最初の登場以降のドイツ文学史」、「ゲーテとシラー」、「19世紀ドイツ詩史」、そしてゲーテの『ファウスト』に関する講義を聴講しました。また、彼の「口頭発表および文章表現の演習」にも参加しました。それは、テュービンゲン大学におけるウーラントの制度[4]を模した、独特な大学のゼミナールでした。シュレーアーはドイツ語学研究の出身で、オーストリアにおけるドイツ語の方言について重要な研究を行っており、グリム兄弟の系統に属する研究者であり、文学研究においてはゲルヴィヌスの崇拝者でした。彼はそれ以前、ウィーンのルター派の学校の校長を務めていました。彼は、詩人であり非常に功績のある教育者でもあったクリスティアン・エーザーの息子です。私が出会った当時、彼はすっかりゲーテに傾倒していました。彼は、広く読まれているゲーテの『ファウスト』や他の戯曲の注釈書を執筆していました。彼はドイツ・観念論が衰退する前に、ライプツィヒ、ハレ、ベルリンといったドイツの大学で学んでいました。彼は、気品あるドイツ的教養が生身の人間となった存在でした。その人間性に強く惹きつけられ、私はすぐに彼と親しくなり、その後は彼の家に頻繁に通うようになりました。彼の家は、乾燥した唯物論的なドイツ教養の砂漠の中にある、まるで「観念論のオアシス」のようでした。外的な生活において、この時期のオーストリアは民族闘争に明け暮れていました。シュレーアー自身は自然科学からは遠いところにいました。

※原註〔[4] ルドルフ・シュタイナーによるルートヴィヒ・ウーラント（1787〜1862年、テュービンゲン）の伝記（「政治と研究。大学教授」の章、GA 33所収）を参照。〕

しかし私は当時、1880年の初めから、ゲーテの自然科学研究に取り組んでいました。

その後、ヨーゼフ・キュルシュナーが『ドイツ国民文学』という包括的な叢書を創刊し、シュレーアーがそこに収められるゲーテの戯曲の、導入と注釈の編集を行いました。そしてキュルシュナーは、シュレーアーの推薦によって、私にゲーテの自然科学論文集の編集を委ねたのです。

シュレーアーはその論文集に序文を寄せ、それによって私を文学界（言論界）へと世に送り出してくれました。

私はこの叢書（『ドイツ国民文学』）のなかで、ゲーテの植物学、動物学、地質学、そして色彩論への導入（解説）を執筆しました。

これらの導入を読めば、そこにすでに、哲学的な観念論の衣をまとった神智学的な思想を見出すことができるでしょう。

そのなかには、ヘッケルとの論争も含まれています。

その哲学的な補完となったのが、1886年に執筆した私の『認識論（ゲーテ的世界観の認識論要綱）』です。

その後、私はオーストリアの女流詩人M・E・デッレ・グラツィエとの知遇を得たことで、彼女の父親のような友人であったラウレンツ・ミュルナー教授を介して、ウィーンの神学教授たちのサークルへと紹介されました。マリー・ウージェニー・デッレ・グラツィエは、長編叙事詩『ロベスピエール』や戯曲『影』を書いた人物です。

1880年代の終わりに、私は短期間、ウィーンの『ドイツ週報（Deutsche Wochenschrift）』の編集長を務めました。この経験は、オーストリアを構成する様々な民族の「民族魂（Volksseelen）」に集中的に向き合う機会をもたらしました。霊的な文化政治のための導きの糸が見出されねばならなかったのです。

これらすべての活動において、オカルトの思想を公に前面に出すことなどは到底考えられませんでした。そして、私の背後にいたオカルトの導き手たちも、私にただ一つの助言だけを与えていました。「すべてを観念論哲学の衣に包みなさい」と。

これらすべてと並行して、15年以上に及ぶ家庭教師および私塾教師としての私の教育活動がありました。

1880年代の終わりにウィーンの神智学サークルと最初に接触したことは、外的な影響（進展）を残さずに終わるほかありませんでした。

私はウィーンでの最後の数ヶ月間に、小論文『新しい美学の父としてのゲーテ』を執筆しました。

その後、私は当時設立されたばかりのワイマールの「ゲーテ・シラー文庫」に招聘され、ゲーテの自然科学論文集の編集にあたることになりました。この文庫において私は公式な役職に就いていたわけではなく、単にゲーテ作品の膨大な「ゾフィー版（大公妃ゾフィー記念版全集）」の共同編集者の一人にすぎませんでした。

私の次の目標は、純粋に哲学的な方法で、私自身の世界観の基礎を提示することでした。それは、『真理と科学』および『自由の哲学』という二つの著作によって果たされました。

ゲーテ・シラー文庫には、ドイツ国内のみならず、国外からも、学者、文人、その他の膨大な名士たちが訪れていました。私は彼らの多くと親しく知り合う機会に恵まれました。というのも、私は間もなく文庫の館長であるベルンハルト・ズファン教授と親しくなり、彼の家へ頻繁に出入りするようになったからです。ズファンは、文庫の来訪者たちとの多くのプライベートな会合に私を同席させてくれました。そのような機会の一つに、トライチュケとの出会いもありました。

当時、私がとりわけ深い友情を結んだのは、その直後に亡くなったドイツの神話研究家であり、『スフィンクスの謎』の著者であるルートヴィヒ・ライストナーでした。

また、ヘルマン・グリムとも対話を重ねました。彼は、自身の手で完成されることのなかった著作『ドイツ的想像力の歴史』について、私に多くを語ってくれました。

それから、「ニーチェのエピソード」が訪れます。私はその少し前、むしろニーチェに対して批判的なスタンスで記事を書いたことさえありました。

しかし、私のオカルト的な諸力は、時代の潮流のなかに、気づかれないように「真に霊的なもの」への方向性を流し込むよう私に指示していました。人が真の認識に達するのは、自身の立場を絶対的なものとして押し通そうとするときではなく、他者の精神の潮流のなかに身を沈めることによってなのです。

こうして私は、完全にニーチェの立場に身を置いて、ニーチェに関する本（『フリードリヒ・ニーチェ、その時代に抗する者』）を書きました。おそらくまさにその理由ゆえに、この本はドイツ国内におけるニーチェに関する最も客観的な書物となっています。ワーグナー反対派、そしてアンチクリスト（反キリスト）としてのニーチェの正当性も、そこでは完全に評価されています。

そのため私は一時期、最も徹底した「ニーチェ主義者」の一人とみなされていました。——

当時、ドイツで「倫理文化協会」が設立されました。この協会は、あらゆる世界観に対して完全に中立な道徳を打ち立てようとしていました。それは完全に机上の空論であり、文化に対する脅威でした。私はこの設立に対し、週刊誌『未来（Die Zukunft）』に激しい批判記事を寄稿しました。

その結果、激しい反論が巻き起こりました。そして、私がそれに先立ってニーチェに没頭していたことが仇となり、私を批判する以下のようなパンフレットまで出版されるに至ったのです。

『ニーチェの狂信者たち（Nietzsche-Narren）』

しかし、オカルト（神秘学）の立場が要求するのは、「不必要な論争はしないこと」、そして「できる限り、自己弁護を避けること」です。私は平静を保ち、ワイマール時代の締めくくりとなる著書『ゲーテの世界観』を書き上げました。

私の『未来』誌への寄稿のすぐ後に、ヘッケルが私にアプローチしてきました。彼はその2週間後、同じ『未来』誌に記事を寄せ、「倫理は世界観の土台の上においてのみ生じ得る」という私の見解に、公に賛同を表明したのです。

それから間もなくして、イェーナでヘッケルの60歳の誕生日の盛大な祝賀会が催されました。ヘッケルの友人たちが私を招待してくれたため、私はこのとき初めてヘッケルに会いました。彼の人柄は魅惑的なものでした。彼は個人としては、その著作に見られる攻撃的なトーンとは完全に真逆の人物です。もしヘッケルが、かつて少しでも哲学を学んでいたなら——哲学において彼は単なるディレッタントどころか、子供のようなものなのですが——、彼は間違いなく、自身の画期的な系統発生学（Phylogenie）の研究から、最高峰の霊的な結論を導き出していたことでしょう。

実際のところ、あらゆるドイツ哲学や、他のすべてのドイツ的教養を差し置いても、ヘッケルの系統発生の思想こそが、19世紀後半のドイツの精神生活における「最も重要な業績」なのです。そして、オカルト（神秘学）に対してヘッケルの学説ほど優れた科学的基礎を提示するものはほかにありません。ヘッケルの学説は偉大です。しかし、ヘッケル自身はその学説の「最悪の解説者」でした。同時代の人々にヘッケルの弱点を示すことは、文化にとって何ら有益ではありません。むしろヘッケルの系統発生思想の偉大さを提示することこそが、文化の役に立つのです。私はそのことを、ヘッケルに捧げた2巻からなる著書『19世紀の世界観と人生観』、および小論文『ヘッケルとその敵対者たち』の中で実践しました。

ヘッケルの系統発生学の中にこそ、当時のドイツの精神的本質が、実質的に唯一生き永らえていたのです。哲学はこれ以上ないほど不毛な状態で失意の中にあり、神学は自身の不誠実さに微塵も気づいていない偽善

の織物であり、諸科学は大きな経験科学的（実証主義的）躍進にもかかわらず、極めて荒涼とした哲学の不可知論へと陥っていました。

1890年から1897年まで、私はワイマールにいました。

1897年、私は『文学雑誌（Magazin für Literatur）』の編集者としてベルリンへ移りました。著書『19世紀の世界観と人生観』や『ヘッケルとその敵対者たち』は、すでにこのベルリン時代に属するものです。

私の次の課題は、文学界に霊的な潮流を定着させることでした。私は『文学雑誌』をこの課題のために捧げました。それは1832年から続く歴史ある定評のある機関誌であり、これまで様々な局面を経てきたものでした。

私は、慎重に、そしてゆっくりと、誌面を秘教的な方向へと導いていきました。慎重でありながらも明確に――。私はゲーテの生誕150周年に際して、次のような論文を執筆しました。

『ゲーテの秘密の黙示録（Goethes geheime Offenbarung）』

これは、かつてウィーンで行った公開講演の中で、ゲーテの童話『緑の蛇と美しい百合の物語』についてすでに暗示していた内容を、改めて論じたものにすぎませんでした。

事の性質上、私が『文学雑誌』で創始した方向性に対して、読者層がゆっくりと集まってくるのは当然のことでした。確かに読者は集まりましたが、出版社がそれを財政的に見込みがあると判断できるほど急速なものではありませんでした。私は当時の若い文学的潮流（自然主義や世紀末文学など）に精神的な土台を与えたいと考え、実際にその潮流の最も前途有望な代表者たちと非常に活発に交流していました。しかし、私は一方では見捨てられ、他方では、この文学的潮流自体が間もなく、ニヒリズムか、さもなければ唯物論的な自然主義のなかに沈んでいってしまったのです。

その間、すでに労働者階級との結びつきへの道が開かれていました。私はベルリンの労働者教育学校の教師になりました。そこで私は歴史学や自然科学を教えました。私の徹底して観念論的な歴史の方法論と教え方は、間もなく労働者たちに好意的に受け入れられ、理解されるようになりました。受講者の数は増え続け、私はほぼ毎晩のように講演を依頼されるほどになりました。

やがて、私の背後にいたオカルト（神秘学）の諸力と調和する中で、自分自身に対して次のように告げてもよい時が訪れました。

――あなたは哲学的な方法で、世界観の基礎を提示し終えた。
――あなたはその時代思潮を、まるでその完全な信奉者であるかのように扱うことによって、それに対する理解を証明してみせた。
――「このオカルト主義者は、時代の哲学や自然科学の成果を知らないから精神世界（霊界）のことを語っているのだ」とは、もう誰にも言えないはずだ。

私は40歳という年齢に達していました。マスター（導師）たち[5]の教えによれば、この年齢を迎える前には、何人も公にオカルトの教師として登場してはならないとされています（それ以前に教えを説く者がいれば、そこには必ず誤りがあります）。

※原註〔[5] 詳細は『秘教学校の第一部門の歴史と内容について 1904-1914』（GA 264）を参照。〕

これで私は、公に神智学へと身を捧げることができるようになりました。その直後の結果として、ドイツ社会主義のある指導者たちの強い要求により、労働者教育学校の総会が招集されました。それはマルクス主義か私か、どちらかを選ばせるためのものでした。しかし、私の追放を狙った陶片追放〔訳註：オストラキスモス。古代ギリシアのアテナイ（アテネ）で実施された、独裁者の出現を防ぐための国外追放制度〕のようなその決議は、私に不利には働きませんでした。総会では、わずか4票の反対をのぞく全会一致で、私を教師として留任させることが決議されたのです。

しかし、指導者たちの強圧的な支配によって、私は3ヶ月後に辞職せざるを得なくなりました。彼らは自分たちの立場を悪くしないために、「シュタイナーは神智学の運動で多忙を極めており、労働者学校のために十分な時間を割くことができなくなった」という口実でこの件を覆い隠したのです。

神智学の活動のほぼ始まりの時期から、フォン・ジーフェルス嬢（のちのマリー・シュタイナー）が私の傍らにいてくれました。彼女は、私とベルリンの労働者たちとの関係の最後の局面も、個人的に共に見届けてくれました。

［ II ］

クリスチャン・ローゼンクロイツは、東洋のイニシエーション（参入）と西洋のそれとの調和を見出すために、15世紀の前半に東洋へと旅立ちました[6]。その結果、彼が帰国したのち、西洋における薔薇十字の方向性が決定的に確立されることとなりました。この形態において、薔薇十字団（ローゼンクロイツ主義）は、厳重に秘密にされた学校であるべきでした。それは、19世紀から20世紀への転換期に、外的な自然科学がある特定の諸問題に対して一時的な解決に到達したとき、秘教（エソテリック）に公の任務として降りかかることになる事柄を準備するためのものでした。

※原註〔[6] ルドルフ・シュタイナー「クリスチャン・ローゼンクロイツの化学の結婚」（『哲学と人智学 1904-1918』GA 35所収）、また『クリスチャン・ローゼンクロイツの化学の結婚 1459年』（ヴァルター・ヴェーバーによる現代ドイツ語訳、シュトゥットガルト1957年／バーゼル1978年）を参照。さらに『秘教的キリスト教と人類の霊的指導』（GA 130）を参照。〕

クリスチャン・ローゼンクロイツは、それらの問題として以下のものを挙げていました。

1. 分光分析（スペクトル分析）の発見：これにより、宇宙の物質的な構成が白日の下にさらされること。
2. 物質的な進化論の有機体科学への導入。
3. 催眠や暗示の承認を通じて、通常の意識状態とは異なる別の意識状態が存在するという事実を認識すること。

科学の内部において、これら物質的な認識が成熟して初めて、特定の薔薇十字的な原理が、秘密の神秘科学の中から公の伝達へと移されることになっていたのです。

それまでの時代のために、キリスト教的・神秘主義的なイニシエーションが、西欧に対して次のような形態で与えられました。すなわち、その参入がイニシエーター（伝達者）である「上高地（オーバーラント）からの未知の人」[7]を通じて、サン・ヴィクトール、マイスター・エックハルト、タウラーたちへと流れ込んだ、あの形態です。

※原註〔[7] ルドルフ・シュタイナー『近代精神生活の黎明における神秘主義と現代世界観との関係』（1901年、GA 7）、バーゼルでの1907年11月23日の講演（『秘教レッスンの内容より』GA 266/1所収）、『秘教学校の第一部門の歴史と内容について 1904-1914』（GA 264、230ページ）を参照。〕

この薔薇十字の潮流全体において、さらに「高次の階梯」とみなされているのが、マニのイニシエーション（参入）です[8]。マニは1459年にクリスチャン・ローゼンクロイツをも参入させました。このイニシエーションは、「悪の機働きについての真の認識」から成り立っています。このイニシエーションとその背景は、これからも長い年月にわたり、大衆からは完全に秘匿され続けなければなりません。なぜなら、そのほんのわずかな一筋の光が言論界に流れ込んだだけでも、それは破滅をもたらしてきたからです。かの高潔なギュイヨーがそうであり、そしてフリードリヒ・ニーチェは彼の弟子となったのでした。

※原註〔[8] 比較参照（Vgl.）：1904年11月11日ベルリンでの講義、全集（GA）第93巻『神殿伝説と黄金伝説』。〕

［ Ⅲ ］[9]

※原註〔[9] セクションIII全体については、以下を比較参照：全集第254巻『19世紀における神秘運動とその世界文化への関係』、1912年4月11日ヘルシンフォルス（ヘルシンキ）での講義、全集第158巻『人間と元素世界（エレメンタル界）との結びつき：カレワラ ― オラフ・アステソン ― ロシアの民族性』、さらに全集第258巻『アントロポゾフィー社会との関係におけるアントロポゾフィー運動の歴史と条件』。〕

情報として述べておきます。この形態のまま、直接の形で公に語ることはまだできません。

神智学協会は1875年、H・P・ブラヴァツキーとH・S・オルコットによってニューヨークで設立されました。この最初の設立は、はっきりとした「西洋的」な性格を帯びていました。そして、ブラヴァツキーが膨大な量のオカルト（秘教的）な真理を公表した著作『ヴェールを脱いだイシス（Isis Unveiled）』もまた、そのような西洋的な性格を帯びています。しかしながら、この著作について言わねばならないのは、そこで伝えられている大いなる真理が、多分に歪められた、あるいはしばしば風刺画のような形で再現されているということです。それはまるで、調和のとれた美しい顔が、凸面鏡に映ることで完全に歪んで見えてしまうかのようです。『イシス』のなかで語られている事柄自体は真実です。しかし、その語られ方が不完全な真理の反映になっているのです。

これというのも、それらの真理そのものは、薔薇十字の英知の伝達者でもある「西洋の大いなる参入者（イニシエーター）たち」からインスピレーション（霊感）を与えられたものだからです。一方でその歪みは、H・P・ブラヴァツキーの魂が、これらの真理を受け止める器として不適切なやり方で受け取ってしまったことに起因しています。教養ある知識人たちにとっては、まさにこの事実こそが、これらの真理がより高次のインスピレーションの源泉から来ていることの証明になるはずでした。なぜなら、真理をこれほど歪んだ形で再現してしまうような人間が、自分自身の力だけでこれらの真理を手にすることなど到底不可能だからです。

さて、西洋の参入者たちは、このようなやり方ではスピリチュアルな英知の潮流を人類のなかに流れ込ませる可能性がほとんどないことを見抜き、この形態による計画をひとまず全面的に断念することに決定しました。しかし、門はいったん開かれてしまったのです。ブラヴァツキーの魂は、そこへスピリチュアルな英知が流れ込み得るようにすでに準備されていました。そのため、今度は「東洋の参入者たち」が彼女の魂を指導下に収めることができるようになったのです。

これら東洋の参入者たちは、当初は極めて善き目的を持っていました。彼らは、アングロ・アメリカニズム（英米主義）によって、人類が「思考様式の完全な唯物論化」という恐るべき危険に向かって突き進んでいるのを目にしていたのです。彼ら――これら東洋の参入者たち――は、古くから守り伝えてきた自分たちの形態のスピリチュアルな認識を、西洋世界に予防接種のように移植しようと考えました。この潮流の影響下で、神智学協会は「東洋的」なキャラクターを帯びるようになり、また同じ影響下で、シネットの『秘教的仏教』やブラヴァツキーの『シークレット・ドクトリン（秘密教義）』にインスピレーションが与えられたのです。

しかし、この両者もまた、再び真理の歪曲となってしまいました。シネットの著作は、そこへ持ち込まれた不十分な哲学的知性によって参入者たちの高次の啓示を歪めてしまい、ブラヴァツキーの『秘密教義』は、彼女自身の混沌とした魂によってそれを歪めてしまったのです。

その結果として、東洋を含むマスターたちは、公式の神智学協会からその影響力をますます引き揚げることになりました。そして神智学協会は、高徳な大義を歪めるあらゆる（好ましくない）オカルトの諸力が跳梁跋扈する場（ tummelplatz ）となってしまったのです。

その後に、アニー・ベザントが、その純粋で高潔な思考様式と生き方によって参入者たちの潮流へと入るという、短いエピソード（一時期）がありました。しかし、アニー・ベザントがある特定のインド人たちの影響に身を委ねたことで、この短いエピソードは終わりを迎えます。そのインド人たちは、とりわけドイツの哲学諸を誤って解釈し、その影響下で奇怪な主知主義を展開させていたのです。

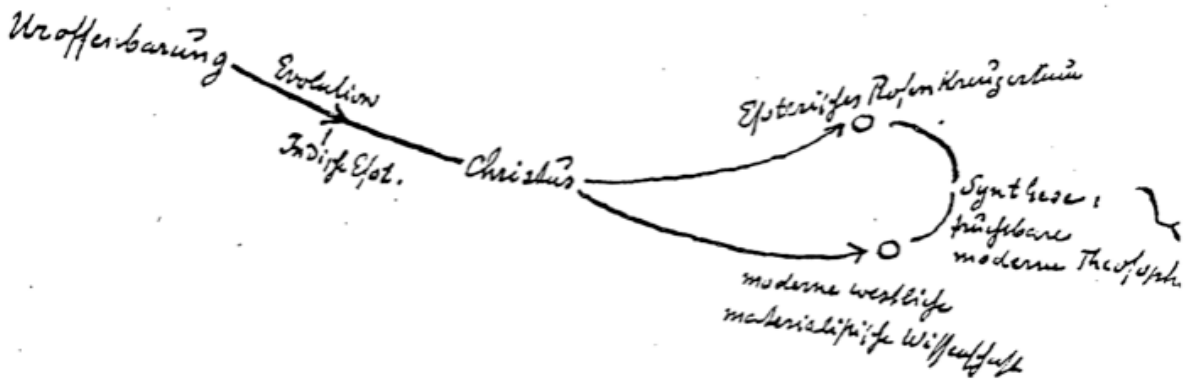
私が自分自身、神智学協会に入会せざるを得ない状況に置かれたとき、事態はまさにこのような局面にありました。協会の揺籃期には本物の参入者たちが立ち会っていたのであり、それゆえに、その後の出来事によってある種の不完全さがもたらされたとはいえ、神智学協会は当面の間、現代のスピリチュアルな生活のための道具であり続けています。

神智学協会が西洋諸国で健全に発展していけるかどうかは、その影響力の中に「西洋のイニシエーションの原理」をどの程度取り入れることができるかに完全に懸かっています。なぜなら、東洋のイニシエーションは必然的に、進化の中心的な宇宙的因子としての「キリスト原理」に触れないままにしておかざるを得ないからです。しかし、この原理がなければ、その出発点にキリストの生涯を有している西洋文化に対して、神智学運動は何の決定的な影響も与えられないまま終わるでしょう。東洋のイニシエーションの啓示は、それ単体では、西洋においては生き生きとした文化の傍らに佇む一つの「セクト」のようになってしまうはずです。それらが進化の中で成功する見込みがあるとすれば、それは西洋文化からキリスト原理を抹殺する場合だけです。しかしそれは、生けるキリストの意図を認識し実現することにある「地球の本来の意味」を消し去ることと同義です。このキリストの意図を、完全なる英知、美、そして行為の形として明かすことこそが、薔薇十字団の最も深い目標なのです。

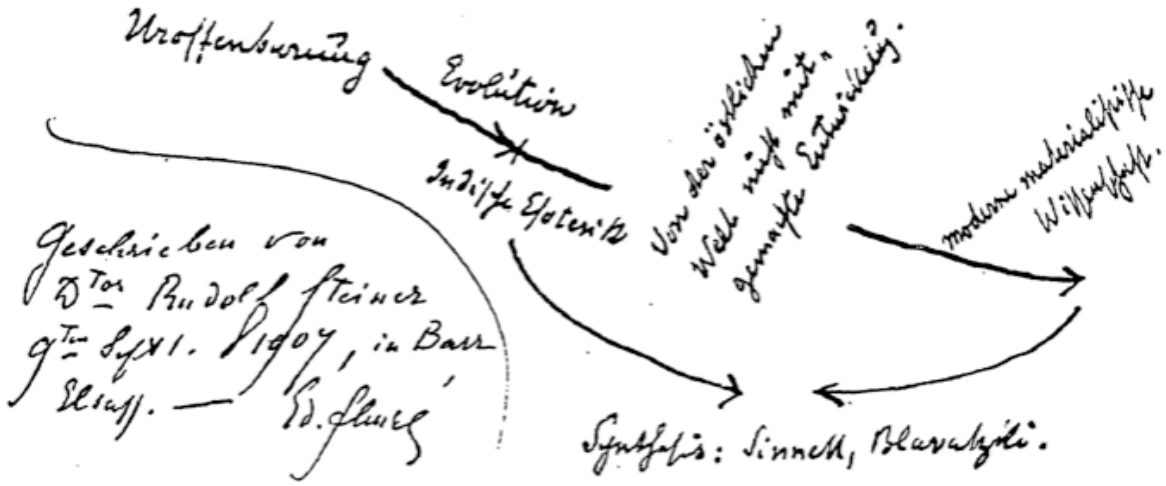
学ぶべき対象としての東洋の英知の価値については、きわめて高い価値があるという意見しかあり得ません。なぜなら、西洋の諸民族が秘教）に対する感覚を失ってしまった一方で、東洋の諸民族はそれを守り伝えてきたからです。しかし、西洋に適した正しい秘教の導入については、それが「薔薇十字・キリスト教的」なものでしかあり得ないという意見の一致を見るべきです。なぜなら、これこそが西洋の生活を生み出したものであり、それを失えば、地球の人類はその意味と目的を否定することになってしまうからです。この西洋の秘教においてのみ、科学と宗教の調和が花開くことができます。一方で、西洋の知識と東洋の秘教のいかなる折衷も、シネットの『エソテリック・ブディズム』がそうであるような、不毛な私生児（雑種）しか生み出し得ないのです。

正しいあり方は、次のように図式化できます。

・［図式1：正しいあり方］
西洋の知識 —— 西洋の秘教（薔薇十字・キリスト教的） —— 健全な発展
誤ったあり方（シネットの『エソテリック・ブディズム』やブラヴァツキーの『秘密教義』がその例です）は、次のようになります。



・［図式2：誤ったあり方］
西洋の知識 —— 東洋の秘教 —— 不毛な混交



●ルドルフ・シュタイナーの記録［Ⅰ］への補遺

エドゥアール・シュレによる、ルドルフ・シュタイナー著『神秘的事実としてのキリスト教』（1908年）フランス語訳への序文より[1]

※原註〔[1] 脚注：テキスト中に掲載されている図やシュレの翻訳に関する書誌情報等への参照。〕

15歳［※原註：実際は18歳］のとき、ルドルフ・シュタイナーは、彼の住む地域に一時的に滞在していた、知識豊かな薬草収集家と知り合いました。この人物が特異だったのは、植物の種や科、その生態を極めて細

部まで知っていただけでなく、植物の隠された力をも知っていた点です。それはまるで、彼がその生涯のすべてを、植物や花々の「無意識で、はかない魂」との対話に捧げてきたかのようでした。

彼には、植物の生命原理である「エーテル体」や、神秘学において植物界の「元素霊」と呼ばれるものを見る才能がありました。彼はそれについて、ごく普通で当たり前のことのように語りました。彼の会話の、落ち着いた、そして冷静で科学的なトーンは、この青年の知識欲と感嘆をいっそうかき立てるだけでした。

のちにシュタイナーは、この奇妙な男が、当時まだ自分が知らなかった「マスター（導師）」から遣わされた人物であることを知りました。そのマスターこそが彼の本来のイニシエーター（伝達者）となるべき人物であり、遠くからすでに彼を見守っていたのです。

第二の視覚（霊視力）を持つこの不思議な植物学者が彼に語ったすべてのことを、若きシュタイナーは、事物の論理と完全に一致していることとして受け止めました。それは、彼が長い間抱いており、大宇宙の根本法則および基礎としてますます彼の理性に迫ってきたある内的な感情を裏付けるものにすぎませんでした。すなわち、世界の運動そのものを構成し、宇宙の生命の「満ち引き」とも呼ぶべき「二重の潮流」の法則です。

私たちは誰もが、天と地にあるすべての存在――天体、植物、動物、人間――を巻き込み、それらを無限の未来へと向かって前進させている外的な「進化」の流れを知っており、それを意識しています。しかし私たちは、それらを休むことなく前方へと突き動かしている根源的な力を知覚しているわけではありません。

しかしながら宇宙には、もう一つの逆行する潮流が存在しており、それは反対の方向へと動きながら、絶えずこの第一の流れ（進化）へと介入しています。これこそが「退化／内流（インボリューション）[1]」の流れであり、これを通じて、目に見えない世界や永遠の領域からやってくる原理、諸力、本質存在、そして魂たちが、絶え間なく目に見える現実の中へと侵入してきているのです。

※原註〔[1] 訳注（Involutionについて）：現代の日本語の人智学（アントロポゾフィー）用語では、Evolution（進化）の対義語としてのInvolutionは「内入」、または霊的なものが物質へと沈み込んでいくプロセスとして「退化」や「内流」と翻訳されます。〕

物質の進化というものは、この精神（霊）の絶え間ない内流なしには、そして、強力な本質存在たちの階層（ヒエラルキー）を伴ってあらゆる生命の偉大なる刺激剤となっている、このオカルト・アストラル的な潮流なしには、到底理解することができないでしょう。このようにして、未来を種子のなかに含んでいる「精神」が物質の中へと内流（沈潜）し、「精神」を受け取った物質が未来へと向かって進化していくのです。

したがって、私たちが盲目的に未知の未来へと向かって歩みを進めている一方で、この未来の側は、世界と人間の歩みの中へと自らを沈めながら、意識的なものとして私たちに向かって逆方向に近づいてきているのです。これこそが「時間の二重の運動」であり、永遠から来たりて永遠へと帰っていく「世界魂（アニマ・ムンディ）」の呼気と吸気なのです。

この二重の潮流について、若きシュタイナーは18歳の頃から直接的な感覚を抱いていました。そしてこれこそが、あらゆる霊的認識を得るための条件なのです。この二つの潮流の原理は、彼が事物を不随意に、かつ直接的に霊視したことによってもたらされました。彼はそれ以降、彼を導くために、彼の背後で、そして彼を通じて働いている秘密の諸力を、反論の余地のないものとして知覚していました。彼はこれらの諸力が語ることに耳を傾け、その微かな合図に従いました。なぜなら、自分自身がそれらの諸力と深い調和の中にあると感じていたからです。

しかし、こうした種類の知覚は、彼の精神生活においては独自の独立した世界を形成していました。これらは彼にとって、あまりにも深く、神秘的で、かつ神聖な真理に思われたため、それらをいつか言葉で表現することなど想像もできませんでした。彼はまるで神聖な泉から汲み上げるかのように、それによって自身の魂を育んでいましたが、その一滴でも外部へと流し出すことは、彼にとって（神聖なものを汚す）「冒涜」のように感じられたのです。

この内面的な、観想の生活と並行して、彼の思考的・哲学的な理性もまた、これ以上ないほど活発に発達していきました。15歳から16歳にかけて、ルドルフ・シュタイナーはカント、フィヒテ、シェリングの研究に深く没頭していました。数年後にウィーンへやってくると、彼はヘーゲルに熱中しました。ヘーゲルの超越論的観念論は、オカルト（神秘学）の境界線にまで迫るものだったからです。

しかし、思索的な哲学だけでは彼を満足させることはできませんでした。彼の、常にポジティブなものへと向かう精神は、観察科学（経験科学）が与えてくれる強固な基盤を求めたのです。そのため、彼は数学、化学、鉱物学、植物学、動物学を徹底的に学びました。

「これらの研究は」と彼は言います。「霊的な世界観に対して、歴史学や文学などよりもはるかに確実な基盤を与えてくれる。後者（歴史や文学）は明確な方法論を欠いており、当時のドイツの学術界の広大な領域に、意味のある光を投げかけることができない状態だったからである」。

自分の前に現れるあらゆる事柄に満ち溢れるほどの関心を持ち、芸術や詩に熱中しながらも、シュタイナーは文学史の研究を疎かにはしませんでした。この分野において、文学史家のユリウス・シュレーアーは、彼にとって素晴らしい導き手となりました。シュレーアーはグリム兄弟の学統に属する卓越した学者であり、とりわけ学生たちの間で「自由な即興のスピーチ」と「文章表現」の技術を養うことに力を注いでいました。この重要な人物のおかげで、若い学生（シュタイナー）は包括的な文学的教養を身につけることができたのです。

シュタイナーは言います。
「当時の唯物論という砂漠の中で、彼の家は私にとって観念論のオアシスだった」。

それでもなお、この人物は彼が探していた「マスター（導師）」ではありませんでした。多種多様な研究と集中的な瞑想のただ中にあっても、彼は宇宙の本来の構造について、その断片しか認識することができませんでした。しかし、彼に生まれつき備わっていた直観は、万物の神聖な根源や、霊的な彼岸（の存在を疑うことを彼に許しませんでした。

この並外れた人物の際立った特徴は、神秘家や思想家たちが最終的な確信の境域に立つ際に経験しがちな、「疑念と絶望の危機」を一度も経験する必要がなかったという点にあります。しかし彼は、全体を照らし、全体に浸透している「本来の光」が、まだ自分には訪れていないと感じていました。青春期が、押し寄せる切実な問題とともに彼に襲いかかりました。どのように自分の人生を構築すべきなのか？ 運命のスフィンクスが彼の前に立ちはだかっていました。彼女が突きつける問いを、彼はどのように解くべきなのでしょうか？

19歳のとき、この若き参入志願者は、自身の指導者――彼が長い間あらかじめ予感していたあの「マスター」――に出会いました。

これは、オカルトの伝統と経験によって裏付けられている事実ですが、高次の真理に対する無私の憧れに魂を燃え立たせている者は、適切な瞬間、すなわち「その者がそれに値するほど成熟したとき」に、自らを参入させてくれるマスターを見出すものです。「叩け、さらば開かれん」とイエスは言いました。これはすべての事柄に当てはまりますが、とりわけ「真理」において真実なのです。ただし、その願いは炎のように熱く、その魂は水晶のように純粋でなければなりません。

ルドルフ・シュタイナーのマスターは、世間には知られることなく、何らかの市民的な職業の仮面をかぶって生活している、あの強力な人間たちの一人でした。彼らが生きるのは、ただ一つの使命を果たすためであり、その使命を知るのは「遺棄のマスターたち（Meister des Verzichts）の同胞団」に属する、彼らと同等の者たちだけです。彼らは人間の歴史的出来事に対して、目に見える形での影響は一切及ぼしません。その素性を隠すことこそが彼らの働きを可能にする条件であり、それによってその影響力はいっそう大きな力を獲得するのです。なぜなら彼らは、全人類の目の前で行動することになる者たちを目覚めさせ、準備させ、導く存在だからです。

ルドルフ・シュタイナーの場合、マスターにとって、その弟子の最初の自発的なイニシエーションを完成させることは難しいことではありませんでした。実際、マスターはシュタイナーに対して、自分自身の本性をどのように使いこなすべきかを示し、必要なあらゆる手立てを差し出すだけでよかったのです。マスターは明晰な方法で、外的な科学と秘密の科学（神秘科学）との結びつき、諸宗教と、現在人類の指導権をめぐって争っている霊的な諸力との結びつきを示しました。さらには、歴史の糸をその手に握り、何世紀もの歩みの中でそれを結び、解き、そして再び結び合わせてきたオカルト（秘教）の伝統の古さを示し。マスターは、意識的かつ理性に裏付けられた「霊視力」へと到達させるために、彼を内的な修練の様々な段階へと迅速に通過させました。わずか数ヶ月の口頭伝授によって、この弟子は、秘教的な総合力の比類なき深みと美しさを知ることとなったのです。

ルドルフ・シュタイナーは、すでに自らの霊的使命を次のように思い描いていました。
「科学と宗教を結びつけること。科学のなかに神を、宗教のなかに自然を呼び戻し、それによって芸術と人生を新たに豊かにすること」

しかし、このあまりにも巨大で大胆な課題に、一体どこから手を付ければよいのでしょうか？ 巨大な鎧をまとい、莫大な財宝の上に横たわる大蛇（ドラゴン）にも比すべき「現代の唯物論的科学」という大敵を、どのようにして打ち負かし、あるいはむしろ、それを手懐けて改心させればよいのでしょうか？ 現代科学のドラゴンを制服し、それを「霊的真理の馬車」へと繋ぐことなど、いかにして可能なのでしょうか？ そして何よりも、「世論という雄牛」をいかにして打ち負かすべきなのでしょうか？

ルドルフ・シュタイナーのマスターは、シュタイナー本人とはほとんど似ていませんでした。彼は、あの深く、ほとんど女性的とも言える繊細さを一切持ち合わせていませんでした。それは、シュタイナーにおいては意志の力を排除するものではありませんでしたが、あらゆる接触を一つの感情的体験へと変え、他者の苦しみを直ちに自分自身の個人的な痛みへと変えてしまうような繊細さでした。これに対してマスターは、男性的な精神であり、支配者としての本性を持ち、ただ「全体」だけを見つめ、個々の人間にはほとんど意味を認めない人物でした。彼は他者を容赦しないのと同様に、自分自身をも容赦しませんでした。彼の意志は、一度砲身を離れたら最後、標的に向かって一直線に突き進み、その線上にあるすべてのものを巻き込んでいく大砲の弾丸に比すべきものでした。

弟子の不安に満ちた問いに対して、マスターはおよそ次のような意味のことを答えました。

「もしお前が敵と戦いたいと願うなら、まず敵を理解しなければならない。そのドラゴンを倒せるのは、お前自身がそのドラゴンの皮を身にまとったときだけだ。雄牛は、その角を捕らえねばならない。最大の見捨てられた苦境のなかにこそ、お前は自らの武器と、自らの戦友たちを見出すことになるだろう。私はお前が何者であるかを示した。さあ、行くがよい――そして、お前自身であり続けなさい！」[2]

※原註〔[2] 脚注：このエピソードおよび言及に関する詳細。
この言明は、マリー・シュタイナーが1947年に『歴史の進展におけるキリスト・インパルス』というタイトルのもとに編集・出版した2つの講演（1911年9月17日ルガーノ、および1911年9月19日ロカルノ、現在は『全集（GA）130』に所収）の序文において裏付けられています。
彼女の序文は、現在では『マリー・シュタイナー著作集 第1巻：ルドルフ・シュタイナーの人智学』（ドルナハ、1967年刊）に収められており、その中で次のように述べられています。
――ルドルフ・シュタイナーは、「批判的な唯物論者が精神（霊界）の啓示に対して突きつけるであろう、あらゆる反論をあらかじめ自分自身に対して課すこと、そして、この方針からのいかなる微細な逸脱も自分に許さないこと」を、完全に自覚的な課題として自分自身に課していた。彼はこのことを、「ドラゴンの皮膚の中へと這い入ること」と呼んでいた。〕

ルドルフ・シュタイナーは、この命令が自分に課すことになる重く険しい道をあらかじめ予感できるほどには、十分にマスターたちの言語を理解していました。しかし同時に、それこそが目標へと到達するための唯一の手段であることも理解していました。彼は従い、自らの旅路へと出発したのです。

〈ルドルフ・シュタイナー全集への寄稿
ルドルフ・シュタイナー遺産管理アーカイブからの刊行物
第42号 1973年夏（Heft42）〉

〔本号（Heft4）の内容について〕

エドゥアール・シュレー
シュタイナー『神秘的事実としてのキリスト教』
フランス語訳への序文

I　ルドルフ・シュタイナーの人格とその発展
II　二つの秘教的伝統 —— 東洋と西洋の秘儀参入
III　秘教的キリスト教の未来

●〔本号（Heft4）の内容について〕

○基本的な視点

シュタイナーの精神的発展過程、薔薇十字主義、東西のイニシエーションの特徴、
人智学への芸術的衝動の導入といったテーマを、
シュレーの視点を通じて浮かび上がらせる「関係性の記録」。

ルドルフ・シュタイナー、マリー・シュタイナー＝フォン・ジーフェルス、
エドゥアール・シュレーの三者の「深い運命的な関係」を、
未公開資料の公開を通じて明らかにする。

特に、シュレーがフランス語訳
『神秘的事実としてのキリスト教』に寄せた序文を、
単なる解説ではなく、当時公的評価が低かったシュタイナーへの
「熱情に支えられた無条件の全人格的な支持宣言」として位置づけている。

シュタイナーの初期活動（神智学協会の枠内での活動）と、
薔薇十字的秘教の公開、キリスト教と古代神秘劇の連関、
人智学運動への芸術的要素の導入という文脈の中で、
三者の相互的な精神的・実践的結びつきが強調されている。

○要点

・著作の起源とシュレーの関わり：

シュタイナーの1901年10月〜1902年3月の
ベルリン・シャルロッテンブルク神智学図書館での
25回連続講演に基づく書。
1910年第2版序文でシュタイナー自身が、
シュレー（『大いなるイニシエート』の著者）が視点に完全に同意し、
フランス語訳を自ら引き受けたことを記している。

・翻訳と序文の経緯：

1907年夏にシュレーが翻訳を完了。
マリー・フォン・ジーフェルスの提案（1907年7月9日付書簡）により、
シュレーが序文を執筆。
そのための資料として、1907年9月にバール（Barr）でシュタイナーが残した
以下の内容の「バール文書（documents de Barr）」が提供された。

１）自伝的スケッチ
（高次の「師との出会い」など、『わが生涯の歩み』にない詳細を含む）
２）薔薇十字的秘教を一般公開するための前提条件
３）神智学運動のオカルト的背景に関する短い情報提供的描写

・シュレーの序文の特徴と内容：

バール文書に加え、シュタイナーとの口頭対話も活用。
匿名の師の性格描写（シュタイナーの根本的特質との対置、
「唯物論という竜と戦うためにはその竜の皮を自ら被らねばならない」という要求）、
若きシュタイナーのアストラル界における「進化と退化の相反する潮流」や
「時間の逆流プロセス」の認識などが、
修辞的な躍動感に満ちた散文で記されている。

・歴史的・人格的意義：

通常の序文を超えた「無条件の支持宣言」。
当時、シュタイナーが公的社会からほとんど評価されず、
古い友人をも失いつつあった時期のもの。
マリー・フォン・ジーフェルスに対しては、
ドイツおよびヨーロッパでの著作普及のための
天才的な組織化能力・行動力、および「芸術的朗読」が
人智学運動に芸術的要素を導入する出発点となったことへの深い敬意
（後のミュンヘンでの神秘劇上演へとつながる線）。

・信憑性と背景：

パオロ・ジェンティッリの覚書などにより裏付けられる。
三者の関係を示す文書・書簡の公開は、
1961年の本誌復刊当初から継続されており、
本号はそれに連なる重要な未公開資料の公開に位置づけられる。

○本文〔本号（Heft4）の内容について〕

ルドルフ・シュタイナー、マリー・シュタイナー＝フォン・ジーフェルス、そしてエドゥアール・シュレーの間に存在した深い運命的な関係は、1961年の本誌復刊当初から初めて公開されてきた数多くの文書や書簡の中に示されています。この関連においてなされたすべての刊行物の概要は記事中で掲載されています。

本号においても、これに関連する極めて重大な未公開資料、すなわちエドゥアール・シュレーが執筆したフランス語版『神秘的事実としてのキリスト教』の序文のドイツ語訳を初めてお届けします。周知の通り、この著作は、ルドルフ・シュタイナーがブロックドルフ伯爵夫妻の招待により、1901年10月5日から1902年3月22日にかけてベルリン・シャルロッテンブルクの神智学図書館で行った、計25回の連続講演に基づいています。

1910年に『神秘的事実としてのキリスト教と古代の神秘劇』という拡張されたタイトルで出版された同書の第2版の序文において、シュタイナーはキリスト教と前キリスト教的神秘劇との本質的な連関を指摘した上で、次のように書いています。

「著者は、キリスト教の本質に関するこのような描写に対して、人類の精神生活に関する意義深い著作を通じて現代の教養を最も深い意味において豊かにしてきたある人物の賛同を得られたことを、深い満足とともに言及せねばならない。『大いなるイニシエート（Les Grands Initiés）』の著者であるエドゥアール・シュレーは、本作の視点に完全に同意し、自ら本作のフランス語翻訳（『古代の神秘劇とキリスト教の神秘劇』というタイトルの下で）を引き受けてくれたほどであった」

1907年の夏にシュレーは翻訳を完了し、それを受けてマリー・フォン・ジーフェルスは1907年7月9日付の手紙の中で、彼自身の手で序文を執筆することを提案しました。この目的のためにシュレーは1907年9月、マリー・フォン・ジーフェルスとともにバール（Barr）の地へ彼を訪ねてきたルドルフ・シュタイナーに対し、彼の精神的発展過程、薔薇十字主義、そして西方（ヨーロッパ）と東方（インドなど）のイニシエーション（伝法）の主要な特徴に関する資料を求めました。

ルドルフ・シュタイナーはこれに応えて、いわゆる「バール文書（documents de Barr）」を書き残しました。当時は直接の出版を意図したものではなく、シュレーが自身の作業を行うための基礎資料として提供されたこの手記は、以下の3つの部分から構成されています。

1. 自伝的なスケッチ（回想）
2. これまで秘密にされてきた薔薇十字的秘教を一般に公開するための前提条件
3. 神智学運動のオカルト的（秘教的）背景に関する、明確に情報提供としてのみ特徴づけられた短い描写

これら3つの文書は、全集（GA）の『書簡と文書』（ドルナハ、1967年）という巻において、ルドルフ・シュタイナーとマリー・シュタイナー＝フォン・ジーフェルスの間の往復書簡の前に挿入されています。このうち「自伝的スケッチ」は、ルドルフ・シュタイナー遺稿管理アーカイブのニュースレター第13号において初めて一般に公開されました。

このスケッチの中で、ルドルフ・シュタイナーは自らの歩みを初めて詳細に描写しました。彼がこれを行った2回目は、（今回は彼に対する中傷的な攻撃に反論するためでしたが）1913年2月4日のベルリンでの講演においてであり、これは全集の『書簡集 I』（第2版、ドルナハ、1955年）の巻に収録されています。これら両方の描写には、彼の人生の終わりに執筆され、未完のまま遺された自伝『わが生涯の歩み』には収録されていない、高次の「師との出会い」などのいくつかの重要なディテールが含まれています。

シュレーは、上述の書き残された手記に加えて、間違いなくシュタイナーからの口頭での対話をも活用していました。このことは、何よりもあの匿名の師の人格を特徴づける記述において当てはまります。その際、ルドルフ・シュタイナーの持つ根本的な特質と、その師の特質との対置は特別な意義を持っており、同時に、「唯物論という竜と戦うためには、その竜の皮を自ら被らねばならない（＝現代の自然科学の徹底的な思考

の中に飛び込まねばならない）」という師からの要求も同様に極めて重要です。またシュレーの記述の中には、自伝的スケッチにおけるものよりもやや異なる、かつ詳細な形で、若きシュタイナーがアストラル界において看取した「進化と退化の互いに相反する潮流」、およびそれに伴う「アストラル界における時間の逆流プロセス」に関する認識も記録されています。

叙述の全体は、マリー・シュタイナー＝フォン・ジーフェルスが何度も（最近では第17号に初版掲載されたエドゥアール・シュレーに関する論文の中で）称賛を込めて際立たせているように、シュレーの散文が持つ特有の修辞的な躍動感に満ちています。後に英語版の同書の序文としても採用された彼の記述が持つ高い歴史的価値は、いくつかの不正確さや見落としによって損なわれるものではありません。なぜなら、それらは通常の意味における単なる序文をはるかに超えたものだからです。それは、シュタイナーがみずからの活動を当面は神智学協会の枠組みの中に置きながらも、公的な社会からはまだほとんど評価を得られず、一部の古い友人たちをも失いつつあったあの時代において、彼に対して向けられた、熱情に支えられた「無条件の全人格的な支持宣言」だったのです。

同時に、シュレーによってルドルフ・シュタイナーの強力な助力者として特徴づけられているマリー・フォン・ジーフェルスの人格に対しても、深い敬意が払われています。彼は、彼女がルドルフ・シュタイナーの著作をドイツ全土、およびその他のヨーロッパ諸国へと普及させるために開花させた、彼女の天才的な組織化の才能と、不眠不休の行動力を称賛しています（この側面における彼女の献身の姿は、以前に出版された彼女とシュレーとの間の書簡からも窺い知ることができます）。

同時に、シュタイナー自身の言葉によれば、彼女による「芸術的朗読」こそが、人智学運動の中に芸術的な要素が導入されるための出発点を形成したとされます。というのも、彼は自伝『わが生涯の歩み』の第34章の中で次のように書いているからです。「これらの朗読という芸術的付加物から、後にミュンヘンにおいて人智学講座と並んで開催されるようになった戯曲（神秘劇）の上演へと至る、一本のまっすぐな線が通っているのである」。この芸術的衝動を実現する上での、シュレーの舞台詩（戯曲作品）が持っていた重要性については、また別の文脈において語られることになるでしょう。

エドゥアール・シュレーによるこれらの記述の信憑性は、再録されている私たちの亡き友人パオロ・ジェンティッリの覚書によっても裏付けられています。

●エドゥアール・シュレー
シュタイナー『神秘的事実としてのキリスト教』
フランス語訳への序文

I ルドルフ・シュタイナーの人格とその発展
II　二つの秘教的伝統 —— 東洋と西洋の秘儀参入
III　秘教的キリスト教の未来

I　ルドルフ・シュタイナーの人格とその発展

○基本的な視点（I〜III 全体）

シュレーは、現代の知識人が「神秘家＝妄想家」
「オカルティスト＝詐欺師」と見なす偏見を批判し、

真の神秘家（内面的沈潜・霊視による神との関係の自覚）と
真のオカルティスト
（直観と総合による自然・人類のなかの神聖なるものの観察）を再定義する。
両者は補完し合い、アデプト（高次の参入者）のなかで統合される。

この枠組みのなかで、ルドルフ・シュタイナーを
「神秘家であると同時にオカルティストであり、
両者が完全な調和・相互浸透によって単一の力となっている」人物として位置づける。
彼の霊的発展は、幼少期からの生まれつきの霊視力、
匿名の師との出会いによる意識的霊視力の獲得、
そして「現代の唯物論的自然科学という竜を打ち破るために、
自らその竜の皮を被る（徹底的にマスターする）」
という使命によって特徴づけられる。

中心的テーマは、西洋の秘教的伝統（特に薔薇十字的キリスト教秘教）と
東洋の秘教的伝統（神智学協会のインド的傾向）との相補性、
およびキリストの受肉が古代の秘儀（神秘劇の奥義）を
歴史のなかで白日の下に公開したという歴史観である。
秘教的キリスト教は、唯物論・懐疑主義によって硬化した
現代文化を再生させるための不可欠な力であり、
教会の未来は「自由」と「普遍性」のなかにある、という展望を提示している。

○要点（I〜III 全体）

I　ルドルフ・シュタイナーの人格とその発展

・幼少期から霊視力を持ち、
　教会儀式の象徴的美しさに惹かれつつ司祭たちの内面的不信仰を見抜く。
　無口で自己統制力に優れ、あらゆる存在に対する深い共感を持つ。

・15歳頃に出会った「霊視力を持つ植物学者」（後に師の使者と判明）を通じて、
　植物のエーテル体や元素霊を知り、二重の潮流の法則
　（外なる進化＝エヴォリューションと、内なる霊的インボリューション）を
　直接的に感覚する。
　これは霊的認識の前提となっている。

・哲学（カント・フィヒテ・シェリング・ヘーゲル）と自然科学を深く学び、
　確実な土台を求める。
　懐疑や絶望の危機を一度も経験しない。

・19歳で匿名の師と出会う。
　師は「放棄の師たちの同胞団」に属し、隠密に活動する強力な人物。
　シュタイナーにすでに起きていた最初の参入を補完し、
　意識的・理性に支えられた霊視力へと導く。

・師の核心的な助言：

「竜を打ち破るには、自らその竜の皮を身にまとう」。
現代の唯物論的自然科学を徹底的に理解・マスターし、
それを精神的真理のために活用せよ、という使命。

・生涯を三期に区分：
ウィーン時代（学究・準備）、
ワイマール時代（ゲーテ・シラー・アーカイブ、哲学的対峙）、
ベルリン時代（神智学協会での活動）。

・ニーチェとの出会い：
超人の悲劇を目撃し、精神世界を切り離した個人主義的傲慢の危険を認識。
ヘッケルとの出会い：
唯物論の論理的厳密さを承認しつつ、
進化の内なる諸力を説明できない限界を見抜く。
進化の事実を「精神科学」の土台とする。

・1902年に神智学協会に入会。
ただし東洋的弟子としてではなく、薔薇十字的秘教の参入者として。
マリー・フォン・ジーフェルスとの協働により活動が拡大する。

II　二つの秘教的伝統 —— 東洋と西洋の秘儀参入

・神智学協会（1875年設立、ブラヴァツキー・オルコット、後にベザント）は
科学と宗教の接近を目指すが、インド的・ヒンドゥー的傾向が強い
（シネット『秘教仏教』、ブラヴァツキー『シークレット・ドクトリン』）。
真理が歪められて伝えられる側面もある。

・西洋の秘密科学は独自の伝統を持つ。
キリスト教秘教は使徒ヨハネに遡り、本質的には4世紀のマニに起源を持つ。
マニの特徴：
キリストを宇宙ロゴスの器官と見る、転生を認める、
悪を絶対的な破滅ではなく「進化の酵素」と見る。

・その後の継承：
カタリ派、テンプル騎士団、ヨハネ騎士団、
15世紀以降の薔薇十字団（クリスチャン・ローゼンクロイツ）。
薔薇十字団は、宇宙の物質的統一性・進化・高次意識状態が
近代科学によって証明されるまで、真理を秘密裡に保存した。

・参入の方法の決定的な違い：

東洋・古代：
長い準備の後、仮死状態（三日三晩の眠り）でエーテル体を肉体から切り離し、
象徴を通じて師が知恵を注入する。
生涯にわたる催眠暗示的な依存が生じる。

西洋（薔薇十字）：
完全な覚醒状態で行われる。
肉体離脱を避け、弟子の自発的努力を媒介にする。
師は「教える」のではなく「目覚めさせる」。
個体性と自由を尊重する。

・正しい態度は、盲目的従属でも敵対的批判でもなく、
思想を自分の上に作用させて観察する第三の態度。
シュタイナーは西洋の方法を代表し、
東洋の知恵（特に宇宙論・先史）を認めつつ、
キリスト教的未来志向と相補的に協働すべきだとする。

III　秘教的キリスト教の未来

・『神秘事実としてのキリスト教』の独創性：

古代エジプト・ギリシアの神殿における参入プロセスと、
ヨハネ福音書に描かれたイエスの生涯との有機的結びつきを事実として示す。
ラザロの復活を、古代の復活儀式が歴史の表舞台に移されたものと解釈する。

・キリストは宇宙ロゴスそのものの受肉であり、復活を成就した存在。
ブッダは古代の「死」に相当する段階にとどまる
（ニルヴァーナは「吹き消す」という消極的含意を持つ）。
キリストこそ世界の地軸であり、歴史の中心である。

・インドの知恵の探求は有益だが、
キリストを視野から外せば神智学は自己否定に陥る。
現代に必要なのは、西洋の伝統に内包された秘教的キリスト教である。

・教会の権威主義的停滞・支配欲は限界に達しつつあり、
唯物論・懐疑主義は文化を荒廃させている。
これを解きほぐすのは、芸術・科学・思考の協働による霊的運動であり、
階層的法則に従った参入の再興である。

・薔薇十字の象徴：
十字架（犠牲・ロゴス）を薔薇（愛・知恵・生命の花）が絡みつく。
per rosam ad crucem, per crucem ad rosam。
教会の未来は「自由」と「普遍性」のなかにあり、
そうでなければ教会は存続し得ない。

○本文〔I ルドルフ・シュタイナーの人格とその発展〕

〔これまでの「人智学」という一単語の哲学史の系譜を踏まえた上で、ここからは「1902年前後の、シュタイナーが神智学・人智学運動のリーダーとして表舞台に立つまさにその瞬間における、フランスの秘教作家エドゥアール・シュレーとの決定的な出会い」の舞台裏へとスポットライトが当てられています。

シュレーは名著『大イニシエール』で知られる当時のオカルト・精神世界界隈の超大物であり、若きシュタイナーの『神秘的事実としてのキリスト教』のビジョン（古代の神秘劇の奥義がキリストの受肉によって白日の下に公開されたという歴史観）に魂を揺さぶられ、自らフランス語への翻訳と、熱狂的な支持を込めた序文の執筆を買って出ました。

そして、その序文の執筆のために、シュタイナーがシュレーに対して自らの極秘の修行時代や霊的体験を明かしたのが、有名な「バール文書」です。ここでは、シュタイナーの正規の自伝には書かれていない「匿名の師との出会い」や、「現代の唯物論を打ち破るために、あえてその竜の皮を被れ（自然科学を徹底的にマスターせよ）」という衝撃的な使命、さらには「アストラル界における時間の逆行」といった、人智学の最も深い秘教的ディテールが語られています。〕

（ロベルト・フリーデンタール訳）

I　ルドルフ・シュタイナーの人格とその発展

現代の最も教養ある人々は、一般に、真の神秘家や真のオカルティストに対して全く誤った想像を抱いています。彼らは人間の精神性が持つこれら二つの形態を、近現代が文字通りあまりにも多く生み出してきた、不完全な、あるいは堕落した実例からしか知りません。

今日のインテリ（知識人）にとって、神秘家とは一種の異常者であり、自分の妄想を事実と思い込む幻想家にすぎません。またオカルティストとは、実在もしない知識や力を偽装するために人々の軽信を利用する、夢想家か、さもなくば詐欺師のことです。確かに、いわゆる神秘家の多くがそのような特徴づけに値するかもしれませんが、それは13世紀のヨアヒム・デル・フィオーレ、16世紀のヤーコプ・ベーメ、あるいは18世紀の「未知の哲学者」と呼ばれるクロード・ド・サン＝マルタンといった人格に対しては、いささかも当てはまるものではありません。

同様に、先述したオカルティストの定義を、パラケルスス、メスマー、ファブル・ドリヴェといった過去の真摯な探求者たちや、現代におけるウィリアム・クルックス、ド・ロシャ、カミーユ・フラマリオンといった人々と結びつけることも、不当であり誤りです。これら大胆な発見者たちについて人がどう考えようと、彼らがそれまで科学にとって未知であった領域への扉を開き、人間の精神に新しいアイディアをもたらしたということは否定できません。

前述のような偏見に満ちた特徴づけは、せいぜい、自らの怠惰を捨てる必要がないようにみずからの浅薄さを高慢な仮面で覆い隠している、科学的ディレッタンティズムを満足させるのが関の山です。また、俗世的な懐疑主義は、自らを無関心から引き離そうと脅かすあらゆるものに対して、皮肉を浴びせることを好むものです。

これら浅薄な判断は脇に置いておきましょう。もし私たちが、あらゆる民族の歴史、聖なる書物、そして世俗の書物に目を向け、さらに実験科学の最新の成果に注目し、これらすべての事実を公平な批判に委ねるならば――すなわち、同じ結果には同一の原因があると帰するならば――私たちは神秘家とオカルティストに対して、全く異なる定義を与えざるを得なくなるはずです。

真の神秘家とは、みずからの理性の力を完全に保持したまま自分自身の内なる世界へと沈潜し、そこで自らの下意識を意識化したのち、瞑想ときわめて厳格に規定された修練の助けを借りて、新しい能力と新しい洞察を獲得する人間のことです。これらの能力と洞察は、彼に自分の魂の最も内なる本質を認識させ、あらゆるものの根底にあり、宗教が「神」、詩が「神聖なるもの」と呼ぶ、あの捉えがたい何か、あの永遠にして最高の真理と自分自身との関係を明瞭にしてくれます。

神秘家と親縁関係にありながらも、兄に対する弟のようにそれとは区別されるオカルティストとは、直観と総合の能力を授けられた人間のことです。彼は科学と哲学の助けを借りて、すなわち「知覚と思考」によって、事物の背景と自然の底流へと分け入ろうと試みます。これらは原理的には不変の方法です。しかしそれらは、創造的な言葉（ロゴス）の錬金術や、無数の存在たちの階層（ヒエラルキア）に対応して、上から下へと下降していく「精神（霊）の諸領域」にも、下から上へと上昇していく「自然の諸領域」にも、その適用において適応していくことができるのです。

したがって、神秘家は、自らの高次の魂を内面において徐々に切り離し、本来の意味での精神的な誕生の行為を経ることを通じて、真理と神聖なるものを探求します。長い努力の末にこれが成功したとき、彼は自分自身の本質の燃え盛る中心へと飛び込み、根源の力、すなわち命の海洋と一体になるのです。

これに対してオカルティストは、神聖なるものが、無限に多様化され、散在した形式で現れる場所、すなわち「自然」と「人類」の内部において、それを発見し、研究し、観察します。パラケルススの深い言葉に従えば、彼はあらゆる存在の中に「一つのアルファベットの文字群」を見て取るのです。人間においてそれらの文字は組み合わされ、生命の完全で意識的な「言葉（ロゴス）」を表現しています。 彼がそこから形成する分析と総合は、彼にとって、あの神聖なるもの、あの真理・美・生命の太陽の似姿であり予感のようなものです。彼はその太陽を直接見ることはできませんが、それは彼の目の前で、無数の鏡（現象）の中に反射しているのです。

神秘家が用いる手段は「集中（濃縮）」と「内なる観察（霊視）」であり、オカルティストが用いる手段は「直観と総合」です。両者は互いに対応し合い、互いを補完し、相互に前提とし合っています。

これら両方の発展段階が、「アデプト」すなわち高次の「参入者」の内部では一つに統合されています。偉大な宗教の創始者たちや、最高の哲学の創造者たちが、これらの一方、あるいは他方の種類の人間に属しており、往々にしてその両方の結合体であったということには、いささかの疑いも差し挟む余地がありません。歴史上、改革者、思想家、詩人、造形芸術家、あるいは政治家として重要な役割を果たした一連の人格のなかに、私たちは、彼らを多かれ少なかれ神秘家、オカルティスト、あるいは参入者として特徴づける能力を見出すことができます。

人間の最高の能力を表し、かつては全般的な畏敬の対象であった人間の精神のこれら二つの変種が、今日においてはなぜ、一般に歪められ、風刺画のような姿でしか現れないのでしょうか。なぜその違いが曖昧になってしまったのでしょうか。なぜこれほどまでに不名誉な評判（信用失墜）に陥ってしまったのでしょうか。

これには深い根拠があり、人間の発達における一つの「動かすことのできない必然性」に対応しています。

過去2000年間、しかしとりわけ16世紀以降、人類はひとつの巨大な仕事、すなわち「地球の征服」と、物質的かつ目に見える世界の領域における「実験科学の構築」を遂行してきました。

この、ヘラクレス的でありティターン（巨神）的でもある仕事をやり遂げるために、人間の超感覚的な霊的諸力は一時的に麻痺させられ、その全知覚能力が外なる世界へと集中させられなければならなかったのです。

しかしながら、超感覚的（霊的）な能力が消滅したことは一度もなく、それらが不活発であったわけでもありません。それらは人類の大衆においては眠っているかもしれませんが、好奇の目からは遠く離れた場所

で、一部の人々の内部において目覚めて存在しています。今日、それらは新しい形態をとって、白日の下に現れつつあります。それらが人間の未来に対して、巨大で決定的な意義を帯びるようになるまで、もはやそれほど長い時間はかからないでしょう。

私は次のことに注目していただきたいのです。すなわち、これらの王者のごとき能力（実証主義が乾燥した辞書的な言葉の羅列に置き換えようとしているもの）は、世界史のいかなるエ時代においても、アジアやアフリカのセム系文明においても、アーリア系文明においても、ギリシア・ラテン世界においても、中世や近現代においても、すべての偉大な人間の創造と、あらゆる真に実りある活動の「源泉であり推進力」であり続けることを止めたことはない、という事実です。内部における観察（霊視）と、すべてを支配する直観という、神秘家とオカルティストを構成するこれら二つの能力の強力な光（閃き）なしに、およそ思想家、詩人、発明家、英雄、科学や芸術の分野における巨匠、あるいは何らかの天才をどのようにして想像できるというのでしょうか。

ルドルフ・シュタイナーは、神秘家であると同時にオカルティストです。

これら二つの性質は、彼の内部において「完全な調和」を保って現れています。どちらが優位であるかを語ることはできません。相互の浸透と融合を通じて、それらは「単一の力」へと変わっています。その結果、彼の内部には、外的な出来事など単なる二の次（副次的なもの）となってしまうような、そういう内的な発展がもたらされたのです。

ルドルフ・シュタイナーは1861年、上（オーストリア）で生まれました[原注]。彼はその幼少期を、ライタ川沿いの小さな町、すなわちシュタイアーマルク、カルパティア、そしてハンガリーとの国境に位置する場所で過ごしました。彼は幼い頃から真面目で、内向的な性質を持っていました。この気質のおかげで、彼は最も気高い内なる観察（霊視）に照らされた子供時代、危険な試練に満ちた青年時代、そして存在の最初の黎明から自身の内部に感じていた「使命」によって戴冠された壮年期を送ることになりました。しかし、その使命の全容と本来の目標は、真理と生命をめぐる戦いの中で、ようやく少しずつ明らかになっていったのです。

※[原注]
ルドルフ・シュタイナーの両親は下オーストリアの出身である。彼自身は、父親が駅の電信技師として勤務していた現在のユーゴスラヴィア［訳注：現在はクロアチア］にあるクラリェヴェツ（Kraljevec）で生まれた。これについて、および以下のシュレーによる記述については、ルドルフ・シュタイナー著『わが生涯の歩み』第1章および第2章を参照のこと。

山に囲まれた人里離れた地方で過ごした子供時代は、ルドルフ・シュタイナーが自身の内部に発見した並外れた能力のおかげで、ある意味で幸福なものと呼ぶことができます。カトリックの教会で、彼は聖歌隊の少年として奉仕しました。礼拝の詩的な美しさや、諸象徴の持つ深い意味は、彼を神秘的に惹きつけました。

しかし、彼には「魂を見る」という生まれつきの霊視力が備わっていたため、彼を驚かせたことが一つありました。それは、儀式の進行や礼拝の物質的な側面にのみ没頭している司祭（神父）たちの、内面にある「秘められた不信仰」でした。

さらに、もう一つの奇妙な特徴は、当時もそれ以降も、彼の前では誰も粗野な迷信や不敬な言葉（神への冒涜）をあえて口にしようとしなかったということです。それはまるで、この静かで洞察に満ちた眼が、相手にただ真面目な思考を強制するかのようでした。

この、ほとんど常に無口であった子供の内部には、知性を媒介にして諸事物の支配者になろうと志向する、静かで不屈の意志が発達していきました。このことは、彼にとって他の人々よりも容易でした。なぜなら、彼は生まれながらにして「自己統制」を備えていたからです。これは大人においてさえ非常に稀な才能ですが、他者を支配する力をその内部に含んでいるものです。

彼の強い意志には、深い、ほとんど心からの共感、すなわちあらゆる存在に対して、いや、命なき自然（鉱物など）に対してさえも向けられた、一種の憐れみに満ちた優しさが伴っていました。彼には、すべての魂の中に何か神聖なものが含まれているように思われました。しかし、なんと分厚い殻の後ろにその黄金の鉱脈が隠されていることでしょう！その貴重な本質が眠っている岩はなんと硬く、その深みはなんと暗いことでしょう！彼の内部には、後に彼が発展させることになる考え、すなわち「すべての人間には、たとえ潜在的な状態であっても、神聖な魂が存在している」という思想が、漠然と脈打っていました。それは、魔法を解かれなければならない「眠れる囚われの身」なのです。この子供の眼にとって、人間の魂は、そのあらゆる悩みや願い、憎しみや愛の激情とともに、完全に「透明」になりました。確かに、彼が看取したその恐ろしい現実こそが、彼のあの大きな無口さの理由だったのです。

しかし、この意図せざる霊視からは、他のあらゆる人間には知られていない至福をも生み出されました。この少年の注目すべき内なる啓示の中から、極めて特徴的なものを一つだけ挙げたいと思います。

ハンガリーの果てしない平原、カルパティアの巨大な森、これら山々にある古い教会（そこでは、聖所の暗闇の中でモンストランツ［聖体顕示台］だけが太陽のように輝いています）は、彼の瞑想の直接の原因ではなかったものの、内なる沈潜を助長しました。

15歳の時、ルドルフ・シュタイナーは、彼の住む地域に一時的に滞在していた一人の博学な植物学者と知り合いました [原注]。この人物の並外れていた点は、植物の品種や科、そしてその生命を微細なディテールに至るまで知っていただけでなく、それらの「秘められた特性」をも知っていたことでした。それはまるで、彼がその全生涯を、植物や花が持つあの無意識で儚い魂との対話の中で過ごしてきたかのようでした。彼は、植物の生きた原理である「エーテル体（生命体）」や、神秘学において植物界の「元素霊」と呼ばれるものを、この眼で見る霊視力を持っていました。彼はそのことについて、まるで完全に普通で、当たり前の事柄であるかのように語りました。彼の会話の、乾燥した、冷徹で学術的なトーンは、この少年の好奇心と感嘆をいっそう増大させました。後に彼は、この奇妙な男が、自分はまだ見ぬ、しかし自らの本来のイニシエーター（伝法者）となるはずの、そして自分をすでに遠くから監視（守護）していたあの「師」からの使者であったということを知るのです。

※[原注] ルドルフ・シュタイナーが薬草採りのフェリックスに出会ったのは、高等技術学校での最初の学年の時、すなわちようやく18歳になってからのことであった。『わが生涯の歩み』第3章を参照。

この「第二の視力（霊視力）」を持つ一風変わった植物学者が自分に語ったすべてのことが、諸事物の論理と完全に一致していることを若きシュタイナーは発見しました。そしてそれは、彼が長きにわたり抱いており、思考（理性）に対して「大宇宙全体の根本法則であり基礎」としてますます要求してきた、ある内なる感情を確証するのに寄与しました。すなわち、世界の運動を構成している「二重の潮流の法則」であり、人がすべての生命の「往還（ 流入と流出）」と呼び得るような、あの法則のことです。

私たちは皆、天と地のあらゆる存在、すなわち星々、植物、動物、人間を巻き込み、それらを無限の未来へと前進させていく「進化の外なる潮流」を意識しています。そこでは、それらを突き動かし、休息なく先へと駆り立てているあの根源の力（一次元的な力）を、私たちは肉眼では感知していません。

しかしながら、宇宙にはもう一つ、これとは真逆の方向に運動し、絶えずこの最初の潮流へと介入してくる反転した潮流が存在します。それこそが「内巻（インボリューション /内向きの発展」の潮流」であり、これを通じて、目に見えない世界や永遠の領域からやってくる諸原理、諸活力、諸霊格、そして諸魂が、間断なく目に見える現実（物質世界）の中へと侵入（浸入）してくるのです。

この絶えざる「精神的（霊的）なインボリューション」なしには、強力な霊格たちのヒエラルキア（階層制）を伴ってあらゆる生命の巨大な刺激手となっているこの「オカルトなアストラルの潮流」なしには、いかなる物質的なエヴォリューションも理解不可能でしょう。このようにして、未来を種子のなかに含んでいる「精神（霊）」が物質の中へとインボリブ（内巻・下降）し、精神を受け入れた物質が未来へと向かってエボリブ（進化・上昇）していくのです。

したがって、私たちが盲目的に見知らぬ未来に向かって歩いている間、この未来（精神世界）の方は、世界と人間の歩みのなかへとみずからを沈降させることによって、意識的に私たちに向かって歩んできているのです。このような形態こそが、時間の「二重の運動」であり、永遠からやってきて永遠へと立ち戻る「世界精神の呼気と吸気」にほかならないのです。

この二重の運動について、若きシュタイナーは18歳（大学入学以降）の時から直接的な感覚を持っていました。この感覚こそが、あらゆる精神的（霊的）な認識のための前提条件です。この二つの潮流の原理は、一回の不随意の直接的な霊視によって彼の内部へと突きつけられていたものであり、彼はそれ以降、自分を導くために、自らの背後で、また自らを透過して作用している「秘められた諸力」に対する、反駁不可能な知覚を持つようになりました。彼はこれらの諸力が語ることに耳を傾け、その合図に従いました。なぜなら、彼はそれらと完全に調和していると感じていたからです。

しかしながら、このような種類の知覚は、彼の精神的生活の中にあって、それ自体で「ひとつの独立した世界」を形成していました。これらは彼にとって、あまりにも深く、神秘的で、かつ神聖なものとして現れた真理であったため、それらをいつか言葉によって表現できるなどとは、到底想像することもできませんでした。彼はそれによって、あたかも神聖な光源から汲み上げるかのように、自らの魂を満たしていました。しかし、その中からたった一滴でも外部へと流出させることは、彼にとって「神聖なものの冒涜」であるかのように思われたのです。

このような内面の、観照的な生命と並行して、彼の思考的・哲学的な知性はきわめて活発に発達していきました。15歳から16歳にかけて、ルドルフ・シュタイナーはカント、フィヒテ、シェリングの学究に深く没頭していました。その数年後にウィーンへやってくると、彼はヘーゲルに熱中しました。ヘーゲルの超越論的観念論は、この哲学者をオカルティズムの境界線にまで引き寄せるものだったからです。

しかし、思索的な哲学では、ルドルフ・シュタイナーを満足させることはできませんでした。彼の「確実なもの（実証的なもの）」を志向する精神は、確固たる土台を要求しており、それを彼に与えられたのは観察を重んじる自然科学だけだったのです。そのため、彼は数学、化学、鉱物学、植物学、そして動物学へと身を投じました。

シュタイナーは次のように語っています。これらの研究は、「精神的な世界観に対して、歴史や文学よりもはるかに確実な土台を与えてくれる。当時の歴史や文学は、精密な科学性を欠いていたため、ドイツの学問という広大な領域に意義深い光を投げかけることができない状態にあった」と。

それでも、身の回りに起こるあらゆる事柄に関心を持ち、芸術や詩を熱愛していたシュタイナーは、文学史の研究をもおろそかにはしませんでした。この領域において、文学史家であるユリウス・シュレーアーが、彼にとっての素晴らしいガイドとなりました。シュレーアーはグリム兄弟の学派に属する優れた学者であり、何よりも学生たちの間で「自由な弁論の術」や「文章表現の洗練」を育むことに尽力した人物でした。この意義深い人物のおかげで、若き学生（シュタイナー）は包括的な文学的教養を獲得したのです。当時の押し寄せる唯物論の砂漠の中で、「彼の家は、私にとって『観念論のオアシス』だった」とシュタイナーは述べています。

しかしながら、彼もまた、シュタイナーが探し求めていたあの「師」ではありませんでした。多種多様な研究と深い瞑想のただ中にあっても、彼は宇宙の本来の構造の断片しか認識することができませんでした。それでも、彼に生まれついて備わっていた直観が、事物の神聖なる根源や精神的な彼岸を疑うことを差し止めていました。

この並外れた人物の決定的な特徴は、最終的な確信へと至る手前で、多くの神秘家や思想家が経験しがちな「懐疑と絶望の危機」を、生涯ただの一度も経る必要がなかったという点にあります。しかし彼は、全体を照らし、全体に浸透している「本来の光」が、いまだ自分にはもたらされていないと感じていました。青春期が、切迫した諸問題を伴って彼を襲いました。自分はどのように人生を設計すべきなのか。宿命のスフィンクスが、彼の前に横たわっていました。彼女が彼に突きつける問いを、彼はどのように解くべきなのでしょうか。

19歳の時、この若き求道者は、みずからの先導者である「師」と出会いました。それは、彼が長きにわたり予感していた出会いでした。

高次の真理に対する無私無欲な憧れに魂を吹き込まれた者は、適切な瞬間に、すなわち「そのための準備が整った時」にみずからを参入させてくれる師を見出すというのは、秘教の伝統と経験によって裏付けられた事実です。「叩け、さらば開かれん」とイエスは語りました。これはすべての事柄において正しいことですが、とりわけ「真理」において真実です。ただし、その願いは、水晶のように澄み切った魂のなかで育まれた、炎のように熱いものでなければなりません。

ルドルフ・シュタイナーの師は、世間には全く知られることなく、表向きには何らかの市民的な職業に就きながら、その本来の使命は、ただ「放棄の師たちの同胞団（ブラザーフッド）」のなかの同等の者たちにのみ知られているという、あの強力な人間たちの一人でした。彼らは人間の出来事に対して、目に見える影響を及ぼすことはありません。「隠密（インコグニート）」であることこそが彼らの作用の前提条件であり、それゆえに彼らの力は、それだけいっそう強大なものとなるのです。歴史の表舞台で一見して自立して行動しているように見えるアクター（主役たち）は、彼らによって刺激を与えられ、準備され、導かれているのです。

ルドルフ・シュタイナーを前にして、その師が、弟子の内にすでに自発的に起きていた最初の参入（イニシエーション）を補完することは、難しいことではありませんでした。師は本来、シュタイナーに対して、彼が自身の天賦の性質をどのように使いこなすべきかを示し、必要なすべての道具を手渡してあげるだけでよかったのです。

師は最も光輝に満ちた方法で、外なる自然科学と隠された秘教的科学との連関を示し、諸宗教と、現在人類の主導権をめぐって争い合っている霊的な諸力との連関を示しました。さらには、世紀の歩みのなかで歴史の糸をその手に握り、それを結び、解き、そして再び結び合わせていくあの「太古から受け継がれてきた秘教」をも開示してみせたのです。

師は瞬く間に、シュタイナーを内なる修行の様々な段階へと通り抜けさせ、彼を「意識的であり、かつ理性に支えられた明確な霊視力」の段階へと一気に引き上げました。わずか数か月のうちに、この弟子は口伝の教えを通じて、秘教的な統合観察の類まれな深みと美しさを知るに至ったのです。

この当時すでに、ルドルフ・シュタイナーは自らの精神的（霊的）な使命の輪郭を心に描いていました。すなわち、「科学と宗教を結びつけ、科学のなかに神を、宗教のなかに自然を導入すること。そしてそれによって、芸術と生命に再び新しい実りをもたらすこと」です。

しかし、このあまりにも巨大で大胆な課題に、どのように立ち向かうべきなのでしょうか。巨大な鎧を身にまとい、莫大な宝物の上に居座っているあの巨大な竜にも似た、現代の唯物論的な自然科学という大敵を、どのように打ち破り、あるいは少なくとも手なずけて改心させるべきなのでしょうか。現代の自然科学というこの竜を、どのようにして精神的真理の馬車の前へと繋ぐことができるのでしょうか。そして何よりも、社会の世論というあの猛牛を、どのようにして打ち負かすことができるというのでしょうか。

ルドルフ・シュタイナーの師は、この弟子とは全く異なる気質の持ち主でした。師の内部には、あの深く、ほとんど女性的とも言える繊細さは微塵もありませんでした。その繊細さは、エネルギーを排除するものではないものの、あらゆる接触をひとつの感情の体験へと変えてしまい、他者の苦しみを即座に自分自身の個人的な痛みへと変えてしまうような、そういう性質のものです。

師は、男性的な精神であり、支配者のごとき性質を持っていました。彼はただ「全体」のみに目を向けており、個々の人間など彼にとってはほとんど何の意味も持たなかったのです。彼は他人を容赦しないのと同様に、自分自身をも決して労わることはありませんでした。彼の意志は、ひとたび砲身を離れたなら、行く手にあるすべてのものを巻き込みながら、ただひたすらに自分の標的へと一直線に突き進んでいく、あの「大砲の弾丸」に喩えられるものでした。

心配に満ちた弟子の問いに対して、師はおおよそ次のような意味のことを答えたのです。
「もしお前が敵と戦いたいと望むなら、まず最初にその敵を理解しなければならない。お前があの竜を打ち破ることができるのは、お前自身が『その竜の皮を身にまとう』ときだけだ。猛牛は、その角を正面から掴まなければならない。最大の逆境の中にこそ、お前は自分の武器と、自らの戦友たちを見出すことになるだろう。私はお前が何者であるかを示した。さあ、行きなさい。そして、お前自身であり続けなさい！」

ルドルフ・シュタイナーは、この命令が自分に課すことになるあの重く険しい道を予感できるほどに、マスターたちの言語を十分に理解していました。しかし彼は、それこそが自らの目標へと到達するための唯一の手段であるということも同時に悟ったのです。彼は服従し、そして自らの人生の旅路へと出発しました。

1880年以降、ルドルフ・シュタイナーの生涯は、互いに全く異なる三つの時期に分けることができます。20代から30代（1881–1891年）は、学究と準備の時代である「ウィーン時代」。30代から40代（1891–1901年）は、思想的対峙と闘争のエポックである「ワイマール時代」。そして40代から46歳（1901–1907年）は、シュタイナーの思想が生きた著作へと結晶化していく、行動と建設のピリオドである「ベルリン時代」です [原注]。

※[原注] これらの日付は概算である。ルドルフ・シュタイナーがワイマールの「ゲーテ・シラー・アーカイブ」に勤務していたのは1890年から1896年のことである。哲学博士号の取得（プロモーション）は、1891年にロストック大学において行われた。

私はウィーン時代について長く立ち止まるつもりはありません。シュタイナーは後にリガで哲学の博士学位を取得し [原注の通り実際はロストック大学]、その後、動物学、地質学、色彩論に関する一連の科学的論文を執筆しました。そこでは、神智学的なアイディアが観念論的な装いをまとって現れています。彼があらゆる事柄に対して発揮したあの厳密さをもって、様々な家庭で行った家庭教師としての活動の傍ら、彼は主筆としてウィーンの雑誌『ドイツ週報（Deutsche Wochenschrift）』を主宰しました。オーストリアの詩人であるマリー・ウージェニー・デレ・グラツィエとの友情は、この最も重い労働の重圧があった時代に、美と詩という温かい太陽の光を投げかけました。

1890年、シュタイナーはワイマールの「ゲーテ・シラー・アーカイブ」の共同研究員として招聘され、ゲーテの自然科学的著作の新装版（校訂作業）を監修することになりました。ここで彼は、二つの重要な著作『真理と科学』、そして『自由の哲学』を執筆しました。「私を導いていた隠された諸力は、精神的なアイディアを、時代の潮流の中へそれと気づかれないように目立たない形で流入させるよう私を促した」と彼は語っています。

しかし、これらの様々な課題は、彼にとって自らの活動のフィールドを研究し、みずからの力を鍛えるための手段にすぎませんでした。目標は彼にとってまだあまりにも遠くにあり、それに到達できるとは到底信じられなかったのです。彼にとっては、小さな帆船で大西洋、太平洋、インド洋を航海し、再びヨーロッパの港に帰港することによって世界を一周する方が、まだ容易なことに思えたほどでした。

自らの船（人智学運動）に装備を施し、それを大海原へと連れ出すことを許してくれるであろう来るべき出来事を待ち望みながら、彼は当時の世界において自らの精神的目標設定に対して決定的な影響を与えることになる、二人の高名な人格と接触することになります。

この二人の人間とは、高名な哲学者フリードリヒ・ニーチェ、そして同じく高名な自然科学者エルンスト・ヘッケルでした。

『ツァラトゥストラ』の著者に関する公平な講演を行った後、ルドルフ・シュタイナーはニーチェの妹（エリザベート・フェルスター＝ニーチェ）から、精神の暗闇（発狂状態）の中で微睡んでいる彼女の不幸な兄をナウムブルクに訪ねてほしい、と懇願されました [原注]。フェルスター夫人は、訪問者（シュタイナー）を、ニーチェが意識を失い、放心した状態でソファの上に身動きもせず横たわっているあの部屋へと案内しました。

※[原注] これについては自伝『わが生涯の歩み』第18章を参照。

この悲劇的な光景は、ルドルフ・シュタイナーにとって極めて重大な意味を持つものとなりました。彼は、あの失敗に終わった「超人」の悲劇の最終幕を実地に目撃したのです。

『善悪の彼岸』の著者は、ビスマルク的帝国主義の現実主義者たちのように観念論を放棄したわけではありませんでした。なぜなら彼は、みずからの天才性によって、精神的なものに対する「直観的な関係」を持っていたからです。しかし、彼はその個人主義的な傲慢さゆえに、精神世界を宇宙から切り離し、神聖なるものを人間の頭脳的意識から切断しようと欲してしまったのです。

彼は、自分が詩的なビジョンとして抱いていたあの「超人」を、それが本来属しているはずの「精神（霊）の領域」へと移し替える代わりに、彼の眼にとっての唯一の現実であった「唯物論的な世界」の中へと暴力的に実現させようと試みました。この理想と物質の分裂から、この巨大な精神の内部に思考のカオスと狂暴

な闘争が生じ、それが時間の経過とともに脳軟化症［訳注：当時の梅毒による麻痺性痴呆の解釈］を引き起こしたのです。

この特殊なケースを説明するために、アタヴィズム（先祖返り）や退化（デジェネレーション）について語る必要はありません。ニーチェの脳細胞を舞台として繰り広げられた、思想と、それに対立する感情とのあの狂気の戦いこそが、彼の悲劇的な宿命をもたらしたのです。シュタイナーは、ニーチェの新しい思考の中にあるあらゆる天才的な要素に対して正当な評価（敬意）を払いましたが、それでも、この誇りに打ち負かされた者、この否定による自己暗殺者は、彼にとって、みずからの内部にある「精神的なものへの霊的感覚」を根絶やしにすることによって自らを破滅させてしまうような、巨大な精神が陥りかねない「アナーキー」の悲劇的な実例にとどまり続けたのです。

フェルスター夫人は、シュタイナー博士を自分の兄の旗印の下で戦う同志にするために、あらゆる手段を尽くしました。彼女はその卓越した巧みさをこれに投入し、この若い作家（シュタイナー）に対して、ニーチェ著作集の編集者（編纂者）および注釈者になってほしいと何度も申し出ました。シュタイナーは彼女の強硬な懇願に対してできる限りの防御を試み、最終的に彼女の前から完全に姿を消しました。フェルスター夫人が彼を一生許さなかったのはそのためです。彼女は、ルドルフ・シュタイナーの内部に、自分の兄の仕事に勝るとも劣らず重要であり、それとは全く異なる実りをもたらすことになるであろう「ある偉大な作品（人智学）」への予感が脈打っていたことを、知る由もなかったのです。
シュタイナーの生涯において、ニーチェは、彼がみずからの人生の本当の戦場へと足を踏み入れようとしていたちょうどその時期に通り抜けた、ひとつの興味深いエピソード（一幕）にすぎませんでした。

これに対して、エルンスト・ヘッケルとの出会いは、彼の精神的発展においてはるかに重要なマイルストーンを表しています。ダーウィンの後継者（ヘッケル）は、この若い参入者（シュタイナー）が持つ精神的・哲学的な熱望――それはシュタイナーにとって単なる仮説ではなく、彼の本質の本来の根底であり、彼の思考の呼吸そのものでした――に対する、表向きは「最大の敵」だったからです。

人間と動物との間の進化の引き裂かれた絆が再び結び合わされて以来、すなわち人間がみずからの全く特別で超感覚的な起源を信じることができなくなって以来、人間は、自らを自らの根源や神聖な使命へと指し示そうとするあらゆるものに対して、最も激しい疑いの目を向けるようになりました。近代人は自らを、数ある現象の中の一つの現象、千の異なる形態のただ中にある一時的な姿、そして盲目的な進化の鎖のなかにあって偶然に委ねられた脆い構成肢にすぎない、と見なすようになったのです。

それゆえにシュタイナーは正当にも次のように語っています。自然科学から生み出されてくるあの「精神の態度（科学的思考）」こそが、近現代における「最大の力」を表現しているのだ、と。しかしその一方で、彼は次のことを自覚していました。すなわち、近代の自然科学は、生物の「外なる形態」の連続的な移り変わりについての記述を与えることはできても、自然の内部において現実に作用している「内なる諸力」については、いかなる回答も与えることができない、という事実です。

シュタイナーは、自分が参入者であり、みずからの世界観がはるかに深いものであったがゆえに、このことを知っていました。だからこそ彼は、私たちの臆病なスピリチュアリストたちや、怯えきった神学者たちの大部分よりも、はるかに強い確信を込めて次のように叫ぶことができたのです。

「人間の魂は、熱情の翼（Schwingen）に乗って、真・美・善の頂点へと高められた挙句、最後には単なる一片の脳物質（脳みそ）のように『無』の中へと掃き捨てられてしまうというのか！」

そうです、ヘッケルこそが敵であり、武装した唯物論者であり、鱗と爪と牙を備えたあの「竜（ドラゴン）」だったのです！

しかしながらシュタイナーは、この人間（ヘッケル）を理解し、彼の持つ意義深い精神に対して正当な評価を払うべき内的必要性を感じていました。彼の学説が論理的であり、明白である限りにおいて、シュタイナーはそれを完全に承認したのです。ここにこそ、シュタイナーの精神が持つ「偉大さと包括性」が明確に白日の下に現れています。

ヘッケルの唯物論的な結論（無神論的帰結）は、別の霊的な科学から生まれ出ていたシュタイナーの思考に影響を与えることはできませんでした。しかしシュタイナーは、この自然科学者（ヘッケル）が成し遂げたあの反論不可能な発見の中にこそ、進化の事実に即した「精神科学」と、理性に支えられた「神智学（人智学）」を打ち立てるための、最も確実な土台を発見することになるだろうということを、すでに明晰に予感していたのです。

それゆえにシュタイナーは、情熱を傾けてヘッケルの『自然創造史』を学び始めました。ヘッケルはその中で、アメーバから人間に至る種の起源の壮大な絵図を描き出しています。彼は器官の漸進的な成長や、生物がいかにしてより複雑で、より完璧な有機体へと自らを高めていったのかという生理学的なプロセスを描写しています。

しかしながら、彼は、数百万年、数億年もの年月を必要とするこの巨大な進化の「上昇」そのものを説明することはできず、生物を段階から段階へと昇華させていく無限に連なる「個々の生命の原動力」については、なおのこと説明できません。これらの根本的な問いに対して、ヘッケルは「自然発生説」以上の回答を提示したことは一度もありませんでした。しかし、この説は、泥の塊から人間が創られたとする物語と同じくらい巨大な奇跡を前提とするものです。

シュタイナーのような神智学徒（人智学者）にとって、世界を現出させる宇宙の力は、その相互に作用し合う諸球体の内部に、結晶化して生物として絶えず受肉していく「無数の魂や霊的生命」を内包しています。

創造の目に見えない帳の後ろを見通すことのできたシュタイナーは、ヘッケルがその肉眼に見える世界を包括した、あのパノラマ的な視野の広さを賛嘆し、認めざるを得ませんでした。たとえこの自然科学者が、創造の神聖なる造物主を公然と否定していようとも、彼自身の成し遂げた見事な記述そのものが、とりもなおさずその存在（神のわざ）の証明となっていたのです。神智学徒（人智学者）は、多様な種の波打ちと、それらを上方へと引き上げる生命の風息のなかに、「生成しつつある人間」「神聖なる思想」そして「目に見えるロゴス（言葉）の現れ」を霊視するのです。

このようにして自らの道を前進しながら、ルドルフ・シュタイナーは自らの師のあの言葉を思い出していました。

「あの竜を打ち破るためには、お前自身がその『竜の皮』を身にまわまわなければならない」

近現代の唯物論という甲冑の内部へと滑り込むことによって、彼はその敵の武器を完全に我が物としました。彼は今や、戦いに打って出る準備が整ったのです。彼にまだ欠けていたのは、ひとつの「活動のフィールド」と、彼を助けにやってくるひとつの「強力な力（パートナー）」だけでした。

彼の活動の舞台となるべき場所は「神智学協会」であり、その助けは、精神的にきわめて重要な一人の女性（マリー・フォン・ジーフェルス）の側からもたらされることになるのです

II　二つの秘教的伝統 —— 東洋と西洋の秘儀参入（イニシエーション）

1897年、ルドルフ・シュタイナーはベルリンにやってきました。彼はそこで文芸雑誌の編集を引き受け、講演を行うことになっていました。そうして彼は神智学協会と知り合うことになります。

シュタイナー博士がそこで果たすことになる重要な役割と、彼がみずからの活動を遂行する上でのあの独立性を理解するためにも、ここでこの協会の起源とその意義について、いくつかの言葉を挿入しておく必要があります。

1875年に設立された神智学協会は、今日（1908年現在）で33年が経過しました。同協会は最新の時代においてその重要性を著しく増大させており、その発足初期のいくつかの奇妙さにもかかわらず、私たちの時代の最も際立った徴候の一つであり、多くの未来の種子を内包したひとつの試みとして見なされなければなりません。

同協会は一人のロシア人女性ヘレナ・ブラヴァツキーと、一人のアメリカ人オルコット大佐によって設立されました。現在は、優れた才能、高潔な人格、そして高い精神性をそこで効果的に発揮している一人のイギリス人女性アニー・ベザントの指導下にあります。

神智学協会は最初から、東洋の哲学とあらゆる秘教的科学をいかなる偏見もなく探求することを自らの課題として掲げていました。科学と宗教の接近こそが私たちの時代の主要な必要性であり、この接近は諸宗派や諸民族の間でも同様に不可欠であると確信していたため、同協会はあらゆる国々の思考する魂と宗教的な素質を持つ精神たちとの間にひとつの絆を編み上げることを目標としました。

彼らの掲げるモットー以上に美しいものは想像できません。

「真理に勝る宗教（至高の教え）は存在しない！」

その憲章は非常に自由なものです。会員に対して、人間の普遍的同胞団（人類の兄弟愛）への参画以外にいかなる信仰告白も要求されません。神智学徒たちは、このような目標が真摯に感じ取られ、実践に移されるならば、それはすべての人間に共通する「神聖な原理」を認め、それを生かすことを意味するのだと確信しています。

科学と宗教における、この自由の思想と「すべての人間に共通するもの」という思想こそが、神智学協会の根本原則であり、現在もなおそうです。東洋においても西洋においても、良心を目覚めさせ、単一の精神の意味において互いを接近させる上で、これほどふさわしいものは他に想像できません。

しかしその一方で、神智学協会はその綱領にもかかわらず、今日に至るまで「きわめて明白な東洋的・ヒンドゥー教的な傾向」を維持し続けており、その本部のロケーションがインドのマドラス近郊のアディヤール（Adyar）に置かれていることによって、その傾向がさらに強化されていることは紛れもない事実です。

実際、最初からそうでした。協会の方向性をあらかじめ決定づけ、現在もなお大部分の会員にとって決定的な影響力を持っている二つの主要著作、すなわちシネットの『秘教仏教』と、ブラヴァツキーの『シークレット・ドクトリン（秘密教理）』がその原因です。高名なインドのマイスターたち（大師）からインスピレーションを受けたこれら二つの著作には、深遠で意義深い真理が含まれています。その影響力は、これらの真理がそれまで東洋においても西洋においても秘密科学のマスターたちによって厳重に秘匿されてきたものであり、それが今初めて白日の下に現れたがゆえに、それだけいっそう強力なものでした。

しかしながら、これらの書物における教えが、純粋な形態で表現されているわけではないという事実もまた、隠されるべきではありません。シネットにおいては、彼の不十分な基盤しか持たない哲学的知性主義によって、またブラヴァツキーにおいては、多種多様な激情によって掻き乱された彼女自身の魂のあり方によって、真理が「歪められて」いるのです。このような形態で現れる真理は、あたかも歪んだ鏡（凹凸鏡）を通して見る素晴らしい景色のようでもあります。

それにもかかわらず、人間の諸構成肢（肉体・魂・霊の階層）や、天体の進化、そして秘教的宇宙論に関するそれらの記述は、この歪んで再現されたものを正しい精神の目の中で見通すことができるならば、きわめて価値のある宝庫を表現しているのです。このようにして、神智学協会は、東洋の秘教が西洋に向かって語りかけ、西洋に作用するための強力な器官（メディア）となりました。

しかし、同じように独自の伝統、独自のマイスター、そして独自の法則を保持している「西洋の秘密科学」は、この（東洋からの）強力なアプローチに対して、どのような態度をとるべきだったのでしょうか。

西洋秘教は沈黙を守るべきだったのでしょうか。それとも、西洋も同様に語るべきだったのでしょうか。この問いは、19世紀末の西洋のマイスターたちの集会において、様々な角度から議論されました。私たちは以下において、それがどのように解決されたのかを示していくことにします。

ルドルフ・シュタイナーがベルリンにやってきた当時、彼はそこに神智学協会のひとつの支部（ロッジ）を発見しました。このドイツの支部は、超越論的哲学と批判的判断力がその故郷である国にふさわしく、昔から「高度な自立した精神」によって際立っていました。ドイツの協会は、ヒュッベ＝シュライデンが主宰した興味深い雑誌『スフィンクス（Sphinx）』の形態や、カール・デュ・プレルの著書『神秘学の哲学』という形で、オカルト文学に対してすでに価値ある寄与を行っていました。

しかし、主導的な人格たちが退いた後、そのグループはいわば少し「翼が折れた」状態になっていました。ドイツの神智学徒たちは、大きな議論と小さな諍いによって分裂していたのです。

ルドルフ・シュタイナーは神智学協会に入会すべきなのだろうか。この問いが厳然として突きつけられました。そしてそれは、彼にとっても、彼の果たすべき大義にとっても、この上なく重大な意味を持っていたのです。

みずからの最初の師を通じて、そして自分自身の最も深い本質に基づいてみずからが参入していたあの同胞団を通じて、シュタイナーは「別のオカルト学校」、すなわち「西洋の秘教」、それも極めて専門的には「薔薇十字的」な学校に属していました。

私たちはここで、この教えと伝統の歴史を、最も普遍的な輪郭において再現したいと考えます。それをディテールに至るまで描写するということは、公的な教会歴史に対して、あたかも劇場の舞台裏と聴衆の前で演じられている演劇そのものとの関係に等しい、あの「キリスト教秘教の歴史」を執筆することにほかならないからです。

ローマ教会が公式には決して認めなかったものの、キリスト教の秘教は常に存在し続けてきました。

もしその源泉へと立ち戻ろうとするならば、私たちはその最初の代表者を、主（イエス）が愛された弟子であり、最も秘教的で深遠な福音書（ヨハネによる福音書）の創出者である「使徒ヨハネ」の中に見出さね

ばならないでしょう。しかし、本来の意味でのキリスト教秘教の伝統は、4世紀にペルシアのユーフラテス川の岸辺に生きた、あの高名で神秘的な人物、すなわちマニ教の創始者であるマニへと直接に遡るのです。

マニは、歴史の上では「敗者」として現れるものの、その深い影響力が未来のための精神的酵母となった、あの先駆者たちの一人です。アウグスティヌスが、聖アンブロシウスによって公式の教会へと獲得される以前は、熱心なマニ教徒であったことはよく知られています。彼は改宗したのち、マニ教のセクトに対する激しい敵対者となりました。教会は後に、マニに関するすべてのものを、最後の一筋の痕跡に至るまで消し去ろうと試みました。彼の著作を破滅させ、彼の教えをただ歪められた形式においてのみ後世へと伝えたのです。それゆえ人々は、彼の敵対者たちが書いた反論の書物からしかマニ教を知り得ません。それにもかかわらず、私たちはその本質を予感し、この巨大な人格の持つ決定的な意義についての絵図を描き出すのに十分な事柄を知っています。

マニは、最初にペルシアのマギ（魔術師）たちの教えに学び、自らの瞑想と個人的なインスピレーションを通じてキリスト者となりました。彼がみずからの弟子たちに伝えた教えは、公式の教会教義とは次の3つの点において異なっていました。

1.［キリストの捉え方］

双方の教えにとって、イエスが神聖なる啓示の中心であったことは共通しています。しかしマニは、ナザレの預言者（イエス）と神性との連関、あるいはむしろ、宇宙の言葉（ロゴス）の秘儀である「キリスト」との連関を、教会とは異なる方法で捉えていました。マニによれば、マスター・イエスとは、このキリストという宇宙ロゴスの「器官であり代弁者」だったのです。

2.［転生の肯定］

マニは「転生」を信じており、人間の魂が数多くの地上生涯を通じて霊的に上昇していくのだと考えていました。

3.［悪の反転（変容）］

マニの眼において「悪」とは、絶対的なもの（破滅・撲滅させるべきもの）ではなく、正道から逸れてしまった力であり、正しい軌道へと連れ戻されなければならない何かでした。

それは宇宙空間におけるひとつの必要な構成要素であり、全体を前方へと進めるための原動力、すなわち「進化の酵素」だったのです。

これらの思想は、4世紀の民衆はおろか、司教たちに理解されるためにも、確実に進みすぎていました。教会は、退廃していくローマ帝国を打ち破り、野蛮人（ゲルマン民族ら）に強い印象を与えるために、よりシンプルな思考を必要としていたのです。マニがオリエントやギリシアの宗教的あり方と調和して維持していた「個人の参入（イニシエーション）」や「理性のコントロールによるあらゆる人間の行為の制御」の代わりに、アウグスティヌスは、検証を拒む伝承と「不条理なるがゆえに我信ず（クレド・キア・アブスルドゥム）」という原則を据えました。このドグマ（教条）は、信仰によって知性に目隠しをし、自由に対して口枷をはめることを意図したものであり、パウロのあの言葉「私たちはキリストによって自由である」とは真っ向から対立するものでした。手短に言えば、アウグスティヌス以降、教会は「秘儀参入」の権能を自らの内部へと独占し、一般の人類にとっては真の認識へと至るための唯一の手段であったイニシエーションの

道を廃止して、その代わりに「盲目的な信仰のドグマ」を据えたのです。これによって教会は、自らの絶対的で恣意的な権威を確実にしようと欲しました。

マニは、一種のキリスト教公会議によって異端として有罪判決を下され、正確にどのようにしてかは分かっていませんが、この世の生命から死へと送り出されました（処刑されました）。教会の伝統は、ペルシアの王がこれを惹き起こしたと主張しています。しかし、マニはあらかじめ弟子たちを育成しており、彼らをパレスチナ、ギリシア、イタリア、アフリカ、ガリア、さらにはスキティアやドナウ川の岸辺にまで派遣していました。彼の教えは、彼の死に続く数世紀の間、口伝という手段を通じて普及していきました。それは多くの場所でその純粋な活力を失ったものの、他の形態や他の名前の下に、常に新しく上方へと成長していったのです。

ハンガリーのカタリ派、および「アルビジョア派」という名前の下に迫害され根絶やしにされたプロヴァンスのカタリ派、さらにはフランス王フィリップ4世（端麗王）と教皇クレメンス5世によって容赦なく撲滅されたテンプル騎士団は、彼の教えの一部を所有していました。そして、最も純粋な形態において、全ヨーロッパに広がっていたヨハネ騎士団が、このキリスト教秘教の伝統を保存し続けていたのです。彼らの内部において、それは修道院の壁の保護の下、深い秘密の中で語り継がれていきました。彼らの参入（イニシエーション）は「第4の福音書（ヨハネによる福音書）」に基づいていました。彼らは宗教的感情の熱と瞑想を結びつけ、その目標は「愛」を通じて地球の上に神の国を実現することだったのです。

15世紀になると、常に同一の源泉から汲み上げられてきたこのキリスト教秘教は、より多くの在俗の信徒へと移行し、カバラ（ユダヤ神秘主義）や錬金術の影響の下で、より「科学的な性質」を帯びるようになりました。これら二つの精神の潮流は、過度なスコラ学によって乾燥しきっていた西洋の精神たちの中に、新鮮な種子をもたらしました。

まさにこの時代、ある一人の人物、すなわちクリスチャン・ローゼンクロイツが、東洋の参入と西洋の参入の間の総合を求めて、エジプトやインドへと旅立ちました。彼の努力の実りとして「薔薇十字団」が設立されたのです。この組織は、秘密科学の精神的真理を、実験科学が「外なる観察の道」を通じて以下の諸発見を成し遂げるその時まで、厳重な秘密の中に保存する使命を帯びていました。

1. 宇宙の物質的な統一性
2. 生物の単に自然的（唯物論的）と想像された進化
3. 通常の通常の目覚め意識の上層に位置する高次の意識状態

これこそが、クリスチャン・ローゼンクロイツが自らの弟子たちに遺した遺産でした。さて、真の参入者たち（ Eingeweihten ）には精神的な直観を通じて常に知られていたこれらの3つの真理は、まさにそれから4世紀が経った後、近代科学によって実際に科学的に証明されることになったのです。

1. 宇宙の物質的統一性は、「分光分析（スペクトル分析）」によって。
2. 有機体の進化は、ダーウィンやヘッケルによる「種の進化（進化論）」によって。
3. 通常の意識とは異なる人間の意識状態は、「催眠学（ヒプノティズム）や暗示」によって。

この時点から、すなわち今から約20年前（1880年代末〜1890年代頃）から、秘密科学の根本事実、すなわち天体の進化（惑星の進化）、再肉化（生まれ変わり）の教え、そして諸宗教の統一性が、まさに薔薇十字の遺言通り公式に一般へと開示されるようになったのです。

薔薇十字団員ちは慎重な沈黙を貫いていたにもかかわらず、その教えは16世紀の世界において、一連の重要な人格たちを通じて外部へと放射されていました。

私たちはここで、あの奇妙な名著『永遠の知恵の円形劇場』の著者であるカバラ学者ハインリヒ・クンラート、高名な神秘主義の司祭マイスター・エックハルト［原文にある訳注：エックハルトは歴史的には13-14世紀の人物であり、16世紀の文脈に挙げるのはシュレーの錯誤と思われる］、神智学的な靴職人ヤーコプ・ベーメ、錬金術の医師パラケルスス、そしてスペインのオカルティストであるライムンドゥス・ルルスらの名前を挙げることができます。

また、ある程度の数の薔薇十字的アイディアは、純粋な形態ではないにせよ、18世紀のフリーメイソンの中へと移行していきました。多種多様な歪曲があったにもかかわらず、それらの思想は多くの重要な精神たちに対してきわめて素晴らしい影響を及ぼしました。その筆頭として挙げられるべきは、ドイツの最大の詩人です。

ゲーテは、その青年時代に一つの薔薇十字的な参入を授かっており、その痕跡は彼の自伝『詩と真実』の中にも明確に認められます。

それは、彼のライプツィヒ滞在とストラスブール滞在の間の時期に、クレッテンベルク令嬢（Fräulein von Klettenberg）の媒介によってもたらされました。この参入は彼の天才的な才能を豊かに実らせ、彼の生涯を照らす光であり続けました。それは彼の自然科学的な著作に滋養を与え、彼のあらゆる文学作品の底流から光を透過させています。

彼の傑作『ファウスト』は、ファウストがマクロコスモス（大宇宙）とミクロコスモス（小宇宙）、世界精神（世界霊）と地霊（地球霊）を呼び出すあの冒頭の部分から、永遠に女性的なるものの印の下に善が悪に対して勝利を収めるあの結びの場面に至るまで、秘教的な思想（エスオテリク）で満ち満ちています。

その色彩論、植物変態論、そして人間における中間顎骨（椎骨）の発見もまた、まったく同一の思想の方向性に属しているのです。

しかし、秘教の刻印が最も際立ってひとつの詩に焼き付けられているのを見出せるのは、すべての注釈者にとって長年ひとつの謎であり続けながらも、薔薇十字のアイディアに馴染んでいるすべての人にとっては「透き通るような明晰さ」をもって迫ってくる、あの『秘密（Die Geheimnisse）』と題された詩においてです。

真理を求めて遍歴の旅を続けるマルクス兄弟（マルクス修道士）は、夕暮れ時、高い山々に守られた緑の谷の奥深くに隠されるようにして佇む、ひとつの修道院へと辿り着きます。その山門（門扉）の上で、旅人はあの薔薇十字のシンボル、すなわち「薔薇に絡みつかれた十字架」を目にします。それは「愛」によって実りをもたらされた「永遠の真理」の象徴です。

愛を歌う花々の抱擁の下、十字架の中央から、一条の明るい光が三つの光芒となって噴出し、輝かしい雲によって天へと携えられていきます。旅人を迎え入れた修道院の12人の修道士たちは、会章堂（評議室）においてそれぞれが異なる紋章の付された席に着きますが、彼らは「12の異なる宗教」を表現しています。

そして、中央にある「13番目の空席」こそが、彼ら全員にインスピレーションを与えている、あの今は亡きマイスター（師）の座なのです。彼の名は「フマヌス（Humanus：人間的なる者）」であり、彼は隠された秘密の科学、すなわち「永遠の知恵」そのものを表現しています。そして、夜明けの薄明かりの中を出発していくあの美しい若者たちは、彼の使者たちなのです。

ルドルフ・シュタイナーは、ひとつの薔薇十字会員として、みずからの方法である「西洋の参入（イニシエーション）」と、神智学協会の基礎であり源泉をなしていた「東洋の参入」との間の方法論の違いを、この上なく強烈に感じていました。

この違いは、世界やその進化に対する思想的な見解の違いにあるのではなく、世界と人生に対する「態度」の違い、ならびに「修行のあり方の違い」にあるのです。

シュタイナー博士は、西洋の参入者が持つその態度をみずから叙述しています。それは、伝統的な仏教のあり方とは「正反対」をなすものです。彼はその最も注目すべき講演の一つの中で、次のように語っています。

「神智学とは（特定の宗教のように）ドグマを打ち立て、苦行（断食や禁欲）によって肉体を撲滅することを目標とするものである、と主張されてきた。また、人生とは克服されるべきひとつの幻影（マーヤー）である、という思想が流布されてきた。しかし、これらは単なる誇張以上の代物である。これらは、真のオカルティズムの科学と実践によって完全に論破される『誤った教え』にほかならない。
魂（プシュケー）を一匹の『ミツバチ』に喩えるギリシアのメタファー（比喩）の方が、はるかに正しい。ミツバチが巣箱を飛び立ち、花々の蜜を吸い上げ、それを蒸留して（自分の中で練り上げて）みずからの蜂蜜を創り出すように、神聖なるものから発生した魂は、この現実の人生（地上世界）の中へと分け入り、そこでネクター（花の蜜）を採集して、それを再び精神（霊）の世界へと持ち帰るのである。
オカルティズムにおいて問題となるのは、現実を軽蔑すること（世捨て人になること）ではなく、現実を理解し、それを活用することなのだ。肉体（身体）は霊の衣ではなく、「精神（霊）の道具」である。秘密科学の課題は、肉体を不当に甘やかすことではない。むしろ、人間が高次の目的のために、いかにしてこの肉体という道具を使いこなすべきかを教えることにある。
磁石を観察する者が、それを単に『馬の蹄鉄の形をした一片の鋼鉄』と呼んだとして、その磁石の本質を理解したと言えるだろうか。否である！そうではなく、それを『他の鋼鉄を引きつける能力が内部に宿っている一片の鋼鉄』と呼ぶ者こそが、その本質を把握しているのだ。この磁石とまったく同様に、あらゆる物質はひとつの高次の霊的現実によって飽和されており、魂はその物質を支配するために、みずからをその高次の現実によって浸透させなければならないのである」

私たちは今や、インドに端を発する「東洋の参入」と、イエス・キリストにまで立ち戻る「西洋の参入」との間の決定的な違いへと到達します。

インド、エジプト、そしてギリシアの神殿において、求道者は長い準備期間を経た後、みずからの師）よって、一般に「三日三晩」に及ぶ「仮死状態の眠り」へと移行させられました。このような状態において、魂、すなわち意識的な「自我」は、一時的に物理的肉体から切り離されます。しかしそれは、生命力を内包している「エーテル体（生命体）」や、その放射の殻である「アストラル体」とは繋がったままにとどまります。

エーテル体が物理的肉体から切り離されているとき、それは物理的肉体によって包み込まれ保護されているときよりも、はるかに強力に諸印象に対して「高い感受性」を持っています。

ここで、イニシエーターは、物理的肉体から隔離された求道者の魂に対して、みずからの知恵とみずからの思想を「象徴の形式」をとって強力に浸透させます。そして、これらのイメージは、その人生の終わりに至るまで、マイスターの「消し去ることのできない刻印」として魂の内部に残り続けるのです。

目覚めの瞬間に、弟子は「新しく生まれ変わった者」、あるいは「二度生まれた者」として見なされました。彼は確かに、新しい知恵と、全く新しい能力の意識を勝ち取ったのです。しかしそれにもかかわらず、彼

はその人生の終わりに至るまで、みずからのマイスターに対して「最も従属的な依存関係」の中に縛られ続けることになりました。

したがって、キリスト以前の、あるいは東洋の参入とは、ある種の「生涯にわたる催眠暗示」だったのです。

これに対して、西洋の参入（イニシエーション）ははるかに自由であり、人間の「個体性」と「人間の自由」をはるかに高く尊重します。その目標自体は同じです。すなわち、人間の魂からの神聖な魂の誕生であり、一時的な死の状態を通り抜けた後の真の「復活」です。

しかしながら、西洋においては、弟子に対して何一つとして外部から強制されたり、注入されたりすることはありません。 指導者は、あくまで「弟子自身の個人的な努力（自発的な修行）」を媒介にして、この目標へと到達するための道を組み立てるのです。指導者は弟子を先導し、弟子が「自分自身で自らの道を発見できるように」準備を整えてあげるだけです。マイスターはもはや暗示をかける者ではなく、「目覚めさせる者」なのです。

ヴィリエ・ド・リラダンの戯曲『アクセル（Axël）』に登場するマイスター・ヤヌス（Janus）のように、自分に対して数式や突然の啓示という形で科学（オカルト真理）を要求してくる弟子に向かって、彼はこう答えるでしょう。

「私は教えない、私は目覚めさせるのだ！（Je n'enseigne pas, j'éveille !）」

ルドルフ・シュタイナーは、ある講演の中でこのことについて次のように表現しています。

「東洋の参入と西洋の参入との違いは、前者が『睡眠状態』において行われるのに対し、後者は『完全な覚醒状態（目覚めた意識）』において行われるという点にあります。西洋のメソッド（薔薇十字の方法）においては、エーテル体が物理的肉体から切り離されるという、あの常に危険を伴う肉体離脱のプロセスが完全に回避されます。また、弟子がマイスターに対して過度に依存してしまうという盲従の危険も同様に回避されるのです。」

西洋のマイスターは、支配することもなければ、改宗させることも望みません。ただ、自分が霊界で何を見たのか、自分自身の経験から何を確知しているのかを、相手に「物語る」だけなのです。

さて、この物語を聴くにあたっては、三つの聴き方の態度が存在します。

第1の態度：
自分が聴く事柄に対して、あたかもそれが『絶対的な権威』であるかのように盲目的に従属する聴き方。

第2の態度：
ただ批判だけを働かせ、あらゆる思想に対して、最初からまるで『敵対者』に対するかのように身構えて対抗する聴き方。

第3の態度：
奴隷的な依存関係に陥ることもなければ、かと言ってシステム化された頑なな反対派に回ることもなく、ただ素直に、シンプルに耳を傾ける聴き方。人はその思想を自分の上に作用させ、そこで何が起きるかをただ静かに『観察』する。

まさにこの「第3の態度」こそが、西洋の参入における、マイスターに対する弟子の最も自立した正しい態度にほかならないのです。

そして、参入を授ける側の人間に関していえば、彼にとっての第一の規則とは、人がマイスターとなるためには自らのエゴを捨てて他者を高めるという「放棄」へと立ち戻ることにほかなりません。

このように、すべてのオカルティズムは「個人の参入（イニシエーション）」という原則のゆえに、公式の教会組織（権威主義）とは対立する立場にあります。しかしその一方で、オカルティズムの内部自体にも、表立って争い合うことはないにせよ（なぜなら、すべての真のマイスターは両方の方向性の必要性と有用性を認めているからです）、時に互いに衝突を惹き起こしかねない、根本的に異なる二つの潮流が存在しているのです。

みずからのルーツ、みずからの師、そして最も深い熱望を通じて、ルドルフ・シュタイナーは西方（ヨーロッパ）の、すなわち「キリスト教的秘教」に属していました。だからこそ、彼は神智学協会に入会するにあたってあれほど躊躇したのです。「東洋（インド）の代表者たちと行動を共にするべきだろうか、それとも、別の印の下に自分自身の独自の協会を設立すべきだろうか」と。

熟慮の末、彼は1902年に神智学協会への入会を決断しました。しかし、彼は東洋的傾向の「弟子」として加わったのではなく、「薔薇十字的秘教の参入者」として加わったのです。この西洋秘教の立場は、インドの知恵の深さを率直に認め、それに兄弟としての手を差し伸べ、二つの方向性の間に「相補的な連関」の絆を編み上げようとするものです。

二つの潮流は争い合うべきではなく、完全な自由の中で互いを理解し合い、全文化世界の共通の福祉のために協働することを目指すべきだということが、彼には明晰に見通せていました。インドの精神生活は、とりわけ宇宙論や先史時代の人類のエポック（レムリアやアトランティス）の領域において、秘教的知恵の巨大な宝庫を内包しています。これに対して、キリスト教および西洋の秘教伝統は、測り知れない高みから「遥かなる未来」と「人類の最終的な宿命（未来の進化）」を見つめているのです。過去の内部には未来が内包されており、過去は未来を準備します。それはちょうど、未来が過去の中から発展し、過去を成就させるのと同様なのです。

自らの課された使命を遂行するにあたり、ルドルフ・シュタイナーは、計り知れない価値を持つ一人の強力な助力者によって支えられました。彼女のおかげで、彼はみずからの作品（人智学運動）を世界へと携えていくことが可能となったのです。

ロシア出身のマリー・フォン・ジーフェルスは、ロシア語、フランス語、ドイツ語、英語をまったく同じ流暢さで書き、話すことのできる、多才で高度な教養を備えた女性でした。彼女は彼女の方で、ルドルフ・シュタイナーとは別の道を通って神智学へと到達していました。私たち自身をその根底に至るまで照らし出してくれる、あの「すべてを明瞭にする真理」を長年探し求めた末のことでした。

彼女の、謙虚であると同時に気高さに満ちた貴族的な佇まい、その繊細な感受性、そして芸術をも思想をも完璧に把握することのできるその知性は、そのすべてが、彼女を精神世界と社会の間の媒介者であり共同研究者とする上で、これ以上ないほど見事に適合させていました。東洋の神智学は彼女を引きつけ、魅了したものの、彼女を完全に納得させるには至っていませんでした。

ルドルフ・シュタイナーの講演こそが、彼女が探し求めていたあの光を彼女に与えたのです。なぜならその光は、あたかも巨大な中心から放射されるかのように、同時にあらゆる方向へと溢れ出し、すべての謎を解き明かしたからです。彼女は社会的に自由で自立しており、ロシアの良き社交界の多くの人々がそうであるように、自らの全活力を捧げるにふさわしいひとつの「理想」を求めていました。そして今、彼女はそれを見出したのです。

ルドルフ・シュタイナーが神智学協会・ドイツ支部の事務総長に任命されたのち、マリー・フォン・ジーフェルスは彼の助力者となりました。彼女は、この作品をドイツ全土および近隣の国々へと普及させるために、天才的な組織化の才能と、不眠不休の行動力を開花させたのです。

ルドルフ・シュタイナー自身、自らの深い思考の力と、その卓越した雄弁さについて、すでに数多くの実証を成し遂げていました。彼は自分自身を熟知しており、自らの力が最高潮に達していることを自覚していました。しかし、ここで彼女によって自分に対して向けられた、あの深い信頼とあの献身は、彼のエネルギーを何百倍にも増大させ、彼の言葉に飛翔のSchwingen（翼）を授けたのです。

彼の秘密科学に関する著作は、ますます目覚ましい速度で相次いで出版されていきました。ベルリン、ライプツィヒ、カッセル、ミュンヘン、シュトゥットガルト、ウィーン、ブダペストなどにおける彼の講演の回数は、ますます膨大なものとなっていきました。彼の著書はすべて極めて高度な水準を保っています。彼は思想の哲学的・論理的な展開において優れているのと同様に、科学的事実の厳密な分析においても卓越した手腕を発揮しています。彼はまた、みずからが望むときには、自らの思想に対して、独創的で独自の象徴を用いた詩的な形態を与えることさえできるのです。

しかしながら、彼の人格の全体は、プライベートであれ公の場であれ、彼の「直接の現存」とその「生の言葉」を通じてしか現実に体験することはできません。彼の弁論は、尋常ならざる強大なパワーによって際立っていますが、そのパワーは、あたかも気高き繊細さの衣の中に包み込まれているかのようです。

疑いなく、この特質は、彼の内部にある「最高の明徹な知性」と結びついた「完全な魂の均衡」に由来しています。ここには時折、内なる神秘的な魂の震）のような何かが加わり、その波動は、最初の一言が発せられた瞬間から聴衆へと伝播していくのです。彼は、相手を傷つけるような言葉や、品格の枠を外れるような言葉を口にすることは決してありません。思想から思想へ、照応から照応へと、彼は聴衆を「既知のもの」から「未知のも霊的真理」へと優しく導いていきます。

彼が秘密の伝承に従って、地球と人間の平行した発達過程をレムリア、アトランティス、アジア、そしてヨーロッパの諸周期を通じて解き明かすときであれ、現代人の身体的・精神的な進化を提示するときであれ、あるいは薔薇十字的参入の諸段階を描写し、ヨハネによる福音書やヨハネの黙示録を解説し、あるいはみずからの思考を神話、歴史、そして文学へと向けるときであれ、彼の弁論を支配し、それに決定的な品格を与えているのは、常に、あらゆる事実を一つの根本思想の下に総括し、見事な総合のなかに統合してみせる、あの強大無比な「統合観察（普遍的霊視 / 総合の力）」にほかならないのです。

同時に特徴的なのは、聴衆へと伝わってくる内なる熱情、すなわち、世界魂（アニマ・ムンディ）と繊細に響き合うひとつの調べのように彼の言葉から鳴り響いてくる、あの「秘められた魂の音楽」です。

少なくとも、私が今から2年前（1906年）に彼と初めて出会い、その言葉を耳にしたとき、私はそのように感知しました。この定義しがたい神聖な感情について、私の友人である一人の詩人が、このドイツの神智学徒（シュタイナー）の写真を目にした際に放った言葉以上に、適切に表現することはできません。

内面での戦いによって刻み込まれ、最高の頂点において自らの均衡を見出し、外なる困難のただ中にあっても自らの静けさを保ち続けるあの強大な精神によって形づくられた、この深く、すべてを見通すような眼、このエネルギッシュな相貌を前にして、私の友人は思わずこう叫んだのです。

「この人こそは、自分自身と、そして人生の本物のマイスターだ！」

III　秘教的キリスト教の未来

私は、ここにフランスの読者へと手渡すことになる、ルドルフ・シュタイナーの著書『神秘事実としてのキリスト教』について、最後にいくつかの言葉を付け加えておかねばなりません。

数世紀の歩みのなかで、イエスの本質とその人格に関しては、数え切れないほどの仮説がこの世に打ち立てられてきました。伝統的な正統派教義の意味において彼を神性の絶対的で唯一の受肉とする見解から始まり、マニの精神に従ってマスター・イエスの人格とキリスト（彼の中に開示された神聖なる宇宙の言葉［ロゴス］）の人格とを明確に区別するグノーシス主義（マニ教）、さらにはレナンのように彼を単なる素朴な道徳説教者にすぎないとみなす見解や、D・F・シュトラウスのように、彼を宗教創創出の目的のために捏造された単なる伝説にすぎないとみなす見解に至るまで、実に様々です。

ジュール・スリのような低俗極まる唯物論者たちの見解（彼はナザレの預言者を幻覚に苦しむ精神病患者とみなし、キリスト教の全体はその創始者の脳膜炎から生じたのだとしています）などに、今さら立ち入る価値はありません。

ルドルフ・シュタイナーの本書が持つ唯一無二の独創性は、ヨハネによる福音書が描く歴史的なイエスの生涯と、エジプトやギリシアの神殿における「古代の参入プロセス（神秘劇の奥義）」との間に、ひとつの『有機的な結びつき』を完璧に成立させた点にあります。

この結びつきは、かつてグノーシス主義者たちによってもすでに暗示されてはいたものの、やや不鮮明な形而上学の中に包み込まれていました。しかし、シュタイナーの手にかかると、それは完璧に事実によって裏付けられ、最も明徹な光の下に現れるのです。それは、過去をも未来をも同時に照らし出し、イエスという存在を人類の宗教的発展の「絶対的な回転軸」とするような、そういう方法において根拠づけられているのです。

自立的な思考を持つ神学者たちも、偏見のない自由思想家たちも、このドイツの神智学徒（シュタイナー）による論考や、彼がエッセネ派におけるイエスの必然的な参入（イニシエーション）を基礎づけているテキスト［原注］を、等しく大きな関心をもって受け止めることになるだろうと私は確信しています。

※［原注］ これについてはルドルフ・シュタイナー著『アカシャ年代記より：第五福音書』（全集 GA 148、1963年版）、特に1913年10月4日のクリスチャニア（オスロ）講演、および1913年11月4日のベルリン講演を参照のこと。

また、シュタイナーが「ラザロの復活」に対して与えている解釈も極めて意義深いものです。彼はこれを、それまでは神殿の最も深い秘密（オカルト）の内部でのみ行われていた古代の復活の儀式が、白日の下に（歴史の表舞台へと）移し替えられたものとして指定しています。ここで本質的なのは、このマイスター（キリスト）の精神的かつ人格的な復活が持っている、魂の、歴史の、そして形而上学的な意味なのです。

シュタイナーは次のように語っています。
「ヨハネによる福音書を、古代人たちがその神殿の内部で生き、演じていたあの『認識の壮大なドラマ』が、歴史の中、そして人生の中で、象徴的であると同時に現実的に成就されたものとして読み解くがよい。そうすれば、人間の視線はキリスト教のミステリー（神秘）を透過して、この世界のミステリーそのものの深奥へと分け入ることになるだろう」

したがって、これは空想的な聖人伝作者たちが捏造した単なる伝説でもなければ、自然の法則と矛盾するような代物でもありません。それどころか、まさに「ありとあらゆる自然法則の最も深い開示」にほかならないのです。それは、みずからの使命と、自らの内部に支配している宇宙の言葉（世界のロゴス）を完全に自覚していた一人のメシア（救世主）を通じて、現実に執り行われた一連の「現実の出来事」なのです。

それは、全人類に対して超進化の手本として提示された、神聖なるものの悲劇的であり、かつ気高い「現実」です。死は現実に被られ、そして、輝かしい復活がそれに続きました。私たちは、 罪の罰としてではなく、ひとつの「宇宙的法則の提示」として、また「不滅性の約束と証明」として、参入者たちの王（キリスト）によって実地に生き抜かれたあの犠牲と勝利を体験するのです。

私たちは今や、ルドルフ・シュタイナーの秘教的キリスト教が、教会の公的教義（ドグマ）とどこにおいて異なり、また両者がどこにおいて一致するのかを見て取ることができます。また、ルドルフ・シュタイナーをインドのネオ神智学徒（当時の神智学協会）から隔てているものをも認識することができます。

これらインドのネオ神智学徒たち、とりわけブラヴァツキーは、最初から歴史的イエスの人格的な　役割を背景へと退け、あるいは少なくとも、彼女たちがより高く、より完璧な参入者として描写した「ブッダ」に対して、イエスの存在がほとんどかき消されてしまうほどに、彼の存在を過小評価し、希釈してしまう明確な傾向を持っていました。彼女たちをこのような態度へと駆り立てたのは、完全に一面的にインドへと向けられていた彼女たち自身のシンパシーでした。ある意味では、これはブラフマン（ヒンドゥー教）の宗教や知恵に対するキリスト教教会、とりわけ英国国教会の無知と不当さに対する、十分に理解可能な「反動」でもありました。

しかし、完全に公平な精神の持ち主であるシュタイナーにとっては、そのような偏った視点は存在しません。彼もまた、人類に対して抱いたあの巨大な憐慈悲ゆえに、王子という身分を捨てて托鉢僧や苦行者となったゴータマ（釈迦）のことを、歴史および宗教における最も重要な人格の一人として畏敬しています。シュタイナーはブッダの持つ高い参入の階梯を完全に承認しており、ブッダがその生涯において、全世界のための壮大な見本として様々な参入の段階をやり遂げたという事実を否定しません。

しかしながら、シュタイナーは次の事実を指摘するのです。すなわち、ブッダがその入滅に際して到達したのは、古代の参入が「死」と呼んでいたものにとどまるのに対し、イエスは、自らの弟子たちの目の前で、そして全宇宙の目の前で「復活」へと到達した、という事実です。

シュタイナーは、ブッダはその生涯を通じて、人間が宇宙の言葉（ロゴス）から芽生え、その地上という殻（肉体）が死ぬときには再びそのロゴスの光へと立ち戻っていく存在なのだということを証明した、と語ります。これに対して、イエス・キリストとは、人間の姿をとって現れたロゴス、すなわち「宇宙の言葉（世界のロゴス）そのもの」なのです。彼において、言葉そのものが肉体となった（肉化・受肉した）のです。

これに対して、ヨーロッパの唯物論的な学者たちは、その文献を手にしながら、次のように反論するでしょう。「正統派の仏教徒にとって、ロゴス（存在の世界）は世界の創造によって何ら善きわざを成したわけではなく、仏教の知恵の最高の目標とはニルヴァーナ、すなわち『滅尽』である」と。ネオ神智学徒たち

は、秘教的な立場から見ればニルヴァーナは全く別の何かを、すなわち私たちの現在の意識状態では到底把握することのできない「神との合一という超人的、いや超天界的な状態」を意味するのだ、と応酬します。

たとえこれが理論的には可能であるとしても、そこには一つの逃れがたい運命が残り続けます。サンスクリット語において、ニルヴァーナとは「吹き消すこと」を意味するからです。人がそこにどれほど形而上学的で超越的な意味を与えようとも、私たち西洋人の耳と魂にとっては、単なるその言葉自体の本源的な意味によって、常に何か「消極的で受動的なもの」がそこに内包され続けることになります。

これに対して、「復活」という言葉は、それが永遠の生命、神聖なる能動的行為を意味するがゆえに、常に「積極的で能動的な意味」を保持しているのです。

傾向や確信からブッダを好むヨーロッパの神智学徒たちが、彼の教えに従い、彼の後を追うのは自由です。これは彼らの正当な権利であり、それによって私たちの経験が豊かになり、私たちの地平が拡張されるのですから、何ら反対すべき理由はありません。しかしながら、キリストこそがこの世界の「地軸」であり、あらゆる歴史の発展は彼の印の下に、彼の精神の内部において起きているのだという事実は、断じて隠されるべきではありません。

現代の神智学が、近代の精神にとって必要不可欠なあらゆる宗教と哲学の「総合」を容易にするために、インドの知恵の宝庫を徹底的に探求していることは、大いなる貢献を表現しています。しかし、もし神智学が、現在と未来を完全に無視してただ「過去」のなかにだけその目を向け続けるならば、あるいは、私たちの惑星の進化における最も本質的で中心的な要因である「キリスト」をその視野から取り除いてしまうならば、神智学は自らに対して「死刑宣告」をくだすことになるでしょう。もし神智学が、私たちの時代の精神に対して実り豊かな方法で作用したいと願うならば、それは、西洋においては伝統の中に内包されている「キリスト教」を通じて、そして外なるキリスト教の命の髄を意味するあの「秘教的キリスト教」を通じて行うほかにないのです。

ルドルフ・シュタイナーがブッダに対するキリストの至高性を主張する際、この判断は、アウグスティヌス以降のキリスト教教会の歴史において、イニシエーション（参入の制度）がどれほど巨きな退廃を被ってきたかという事実に対して、彼の目を眩ませることは微塵もありませんでした。その退廃の原因は、彼の本書の最終章において、際立った明晰さをもって提示されています。

しかし、一人の敬虔なカトリック信徒であり、イタリアの重要な小説家であるアントニオ・フォガッツァーロが、最近、現在の教会の建物内部における「シミ（木喰い虫）」と呼んだ、あの「停滞と支配欲の精神」が、もはや教会を維持していく上では通用しなくなるような、そういう時代が近づいています。

その一方で、物質主義（唯物論）、懐疑主義、そして無神論は、精神的生活のあらゆる水源を文字通り堰き止めてしまいました。それらは文学を荒廃させ、社会の有機体を蝕み、人々の魂を解体しています。

唯物論によるこの「硬化」を解きほぐし、不可欠な変革の準備を整えることができるのは、芸術、科学、そして思考（哲学）の「共同の努力（三つの協働）」であり、あらゆる社会の全領域を同時に包み込むような、あの強大無比な「ひとつの精神的（霊的）運動」だけなのです。その時はじめて、自然と人間の精神のなかに（最初から）刻み込まれているあの階層的な（ヒエラルキアの）法則に従った「参入（イニシエーション）」が、文化の発展のなかに再びみずからの正当な席を見出すことになるでしょう。

ルドルフ・シュタイナーの本書が、まさにこの時代の切実な必要性に対応しているがゆえに、私はこれをフランス語へと翻訳したいという切迫した願いを抱いたのです。

「世界を覆す思想は、鳩の足（ Taubenfüßen ）でやってくる」とニーチェは語りました。この書物の持つ思想もまた、まさにそのようにして静かに、しかし確実にやってくることになるでしょう。

浅薄な人々がそこから目を背けようとも、精神の選良たちはその声に耳を傾けるはずです。なぜなら、これは「生きた声」であり、「道を切り拓く声」だからです。それは戦いを呼びかけるものではありませんが、しかし人々の内面に大いなる戦いを惹き起こすのです。

ルドルフ・シュタイナーの武器とは、彼自身の「思想」にほかならないのです。

私は、そのような思想の中から、一つの思想をここに選び出したいと思います。たとえルドルフ・シュタイナー自身がそれを直接的な言葉としては口にしていなくとも、それは彼の本書から必然的に生み出され、本書を総括しているものなのです。かつて、広く知られてはいなかったものの、同時に優れたオカルティストであったフランスの一人の思想家が、それをかつて口にしたのでした。

それは今から23年前の1885年のことで、アレクサンドル・サン＝ティーヴ（サン＝ティーヴ・ドルヴェードル）が、ユダヤ・キリスト教秘教の深奥のなかにヨーロッパ社会の有機的な諸原理を見出そうと試みた独創的な著書『ユダヤ人の使命（La Mission des Juifs）』を出版した時のことでした。ローマ教会のとるある信徒が彼に異端の疑いをかけ、彼がカトリックであるか否かを言明するよう迫りました。アレクサンドル・サン＝ティーヴは、雑誌『ジュルナル・デ・デバ（Journal des Débats）』に掲載された二つの優れた論説の中でこれに応答しました。その最後の論説は、次の言葉をもって締めくくられていたのです。

「私はカトリック（普遍的）である。そうだ、文字通り普遍的であるが、私のカトリックは『ヒマラヤにまで至るカトリック』なのだ」

この言葉は、おそらく新しい信仰者たちが結集するための合言葉となるでしょう。さらに次のような予言を付け加えることもできます。「教会の未来は「自由」と「普遍性（ユニヴァーサリティ）」の中にこそある。さもなければ、もはや教会など存在しなくなるだろう」と。

これこそが、ルドルフ・シュタイナーの、そして薔薇十字の印の下に結集するすべての人々の態度にほかなまりせん。この印は聖なる伝統を新たに蘇らせ、最も遠い過去と最も遥かなる未来とを結び合わせるのです。

私たちのアーリア人種は、その最も初期の太古の時代から十字架の印を知っていました。それは、ヴェーダの司祭が用いるアラニ（火起こしの木器）のなかで、創造的な炎の象徴として犠牲の炎が噴出するその場所に輝いていました。それは、生命と不滅の印として、エジプトの神殿のアンク十字（輪のある十字架）のなかに仄めいていました。そしてそれは、愛を通じた魂の復活の生きた印として、十字架にかけられ、再び復活したイエス・キリストという人格のなかに燃え盛ったのです。

薔薇十字主義が切望するのは、その十字架の木から近現代の「花」を開花させることによって、十字架の印に対してあの「魔術的なキリストの力」を再び奪還し、取り戻してあげることなのです。それゆえに、十字架は薔薇によって絡みつかれているのです。

参入者にとって、十字架はこれからも、神人（キリスト）およびロゴス（言葉）のすべての英雄たちが成し遂げた神聖なる犠牲の印であり続けます。しかしそれは、彼らにとって同時に「神聖なる科学」の印ともなるのです。なぜなら、その燃え盛る心臓の中からこそ、知恵の光が噴出してくるからです。薔薇十字会員た

ちは、十字架をも、薔薇をも、等しく信じています。彼らはこう語ります。per rosam ad crucem, per crucem ad rosam（薔薇を通じて十字架へ、十字架を通じて薔薇へ）。知恵への愛を通じて知恵へ、知恵を通じて生命と美へ。

エドゥアール・シュレー
パリ、1908年5月